

# 西岡本遺跡第8次発掘調査報告書

2011年

神戸市教育委員会

# 西岡本遺跡第8次発掘調査報告書

2011年

神戸市教育委員会

## 序

神戸市東灘区の位置する六甲山南麓は大阪湾を南に望み、古代から茅渟海（大阪湾）を通じて、交易の盛んな地域であったと考えられています。近代には、気候が温暖で、大都市神戸・大阪の中間にあり、交通の便にめぐまれて、明治・大正時代から住宅地として開発され、所謂「阪神間モダニズム」と称される都市文化を育んだ地でもあります。

今回報告します西岡本遺跡は、谷崎潤一郎の小説にも登場する住吉川の左岸にあり、近年マンション建設に伴う調査で発見され、縄文時代から中世までの居住地や古墳として人々に嘗めた遺跡であることがわかつてきました。

今回の調査では、奈良時代から平安時代前期の建物が発見され、建物の規模や文献史料などから、荘園関連の施設であった可能性もできました。

今回の発掘調査成果の概要である本書が、地域の歴史・文化を理解する資料として、また文化財保護へのご理解を深めていただけ一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査実施および報告書作成作業にあたり終始快くご協力いただきました三井不動産レジデンシャル株式会社をはじめ、関係諸機関ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月31日

神戸市教育委員会

## 例　言

1. 本書は神戸市東灘区西岡本5丁目7-8において実施した宅地造成工事に伴う発掘調査の報告書である。
2. 現地における調査は平成21年11月21日から平成22年1月22日の期間で実施し、遺物整理作業は平成21年度、平成22年度に埋蔵文化財センターにおいて実施した。
3. 現地調査および遺物整理作業は、神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

### 調査組織表

平成21年度（発掘調査）・平成22年度（整理作業）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古資料担当

工　業　普通　大阪府立狭山池博物館館長

和田　晴吾　立命館大学文学部教授

### 教育委員会事務局

教育長　橋口　秀志

社会教育部長　大寺　直秀

教育委員会参事　柏木　一孝

（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹　渡辺　伸行

（埋蔵文化財センター所長事務取扱）

埋蔵文化財指導係長　丸山　潔

埋蔵文化財調査係長　千種　浩

文化財課主査　丹治　康明

文化財課主査　安田　潔

文化財課主査　斎木　巖

事務担当学芸員　中谷　正（平成21年度）　佐伯　二郎（平成22年度）

調査担当学芸員　西岡　巧次

保存科学担当学芸員　中村　大介

遺物整理担当学芸員　黒田　恭正　佐伯　二郎（平成21年度）　西岡　誠司（平成22年度）

4. 遺物の水洗作業は埋蔵文化財センターで行い、遺物の接合・復元・整理は黒田恭正指導のもと遺物整理員　納厚子、芝　恵子、柴田やすよ、谷口康子、中野良栄の各氏が行い、遺物尖端は西岡巧次・中村大介の両名が分担して行った。
5. 報告書に用いた遺構写真は西岡巧次が撮影し、整理後の遺物写真は西大寺フォト　杉本　和樹氏が撮影を行った。
6. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の25000分の1地形図「住吉」、「赤塚山」を、詳細位置図は神戸市発行2500分の1地形図「赤塚山」の一部を使用した。
7. 基準点測量は株式会社神戸測量に委託して実施した。これに基づき本書に用いた方位・座標は、平面直角座標世界測地系で表記し、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表記した。
8. 本書の執筆は、第Ⅲ章第2節(3)-(A)金属製品を中村大介が担当し、その他を西岡巧次が担当した。編集は西岡巧次が行った。なお出土遺物および調査に関わる図面・写真是、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
9. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、宅地造成事業の事業主である三井不動産レジデンシャル㈱に多大なるご協力をいただいた。記して感謝いたします。

# 目 次

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	1	第2節 出土遺物.....	23
(1)位置と環境 .....	1	(1)土器及び陶器類 .....	23
(2)調査に至る経過 .....	2	(A)掘立柱建物.....	23
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境.....	3	(B)土坑.....	24
第1節 地理的環境.....	3	(C)性格不明遺構.....	25
第2節 歴史的環境.....	4	(D)遺物包含層.....	26
第3節 既往の調査.....	7	(2)石器 .....	28
第Ⅲ章 調査の概要.....	9	(3)金属製品 .....	29
第1節 検出遺構.....	10	第Ⅳ章 まとめ.....	31
(1)第1遺構面 .....	10	第1節 西岡本遺跡における遺構群の変遷 .....	31
(A)掘立柱建物.....	10	第2節 西岡本遺跡の歴史的意義.....	32
(B)柵列.....	16		
(2)第2遺構面 .....	17	引用・参考文献 .....	
(A)竪穴住居.....	17	図版 .....	
(B)土坑.....	19	報告書抄録 .....	
(C)性格不明遺構.....	21		

## 挿図目次

第1図 調査地位図.....	1	第15図 第2遺構面遺構配置図.....	18
第2図 調査区設定図.....	2	第16図 SB201平面図及び断面図 .....	19
第3図 住吉川流域の地形.....	3	第17図 SK202平面図及び断面図 .....	19
第4図 西岡本遺跡周辺の地形.....	5	第18図 SK208平面図及び断面図 .....	19
第5図 西岡本遺跡周辺の地形と調査地.....	8	第19図 SK203平面図及び断面図 .....	20
第6図 調査区東壁上層断面図.....	9	第20図 SK205平面図及び断面図 .....	20
第7図 SB01平面図及び断面図.....	10	第21図 SK206平面図及び断面図 .....	21
第8図 第1遺構面遺構配置図.....	11	第22図 SK207平面図及び断面図 .....	22
第9図 SB02平面図及び断面図.....	12	第23図 掘立柱建物・柵列出土土器実測図 .....	23
第10図 SB03平面図及び断面図.....	13	第24図 土坑・性格不明遺構出土土器実測図 .....	25
第11図 SB04平面図及び断面図.....	14	第25図 上層遺物包含層出土土器実測図 .....	27
第12図 SB06平面図及び断面図.....	15	第26図 敷地層出土土器実測図 .....	28
第13図 SA05平面図及び断面図.....	16	第27図 石器実測図 .....	29
第14図 SB07平面図及び断面図.....	17	第28図 鉄製品実測図 .....	30

## 表目次

第1表 西岡本遺跡周辺の主要遺跡一覧…………… 7 第2表 古代禿原郡東部主要掘立柱建物一覧…………… 33

## 写真目次

写真1 金属製品レントゲン写真…………… 30

## 図版目次

### 図版1

1. 西岡本遺跡周辺航空写真(南から)平成6年3月撮影
2. 調査前東側板設柵設営状況

### 図版2

1. 調査区東部全景第1遺構面(北西から)
2. 調査区西部全景第1遺構面(北東から)

### 図版3

1. 調査区東部第1遺構面(北から)
2. 調査区西部第1遺構面(北から)

### 図版4

1. 掘立柱建物SB01(西から)
2. 掘立柱建物SB02(南西から)

### 図版5

1. 掘立柱建物SB03(北西から)
2. 掘立柱建物SB04(北から)

### 図版6

1. 掘立柱建物SB04(東から)
2. 掘立柱建物SA05(北から)

### 図版7

1. 掘立柱建物SB06(南東から)
2. 調査区西部全景第2遺構面(東から)

### 図版8

1. 調査区東部第2遺構面(北から)
2. 調査区西部第2遺構面(東から)

### 図版9

1. 竪穴住居SB201(北から)
2. 土坑SK202(北から)

### 図版10

1. 土坑SK208(北から)
2. 土坑SK202(北から)

### 図版11

1. 土坑SK205(東から)
2. 土坑SK206(北から)

### 図版12

出土遺物 土器(1)

### 図版13

出土遺物 土器(2)・金属製品・石器

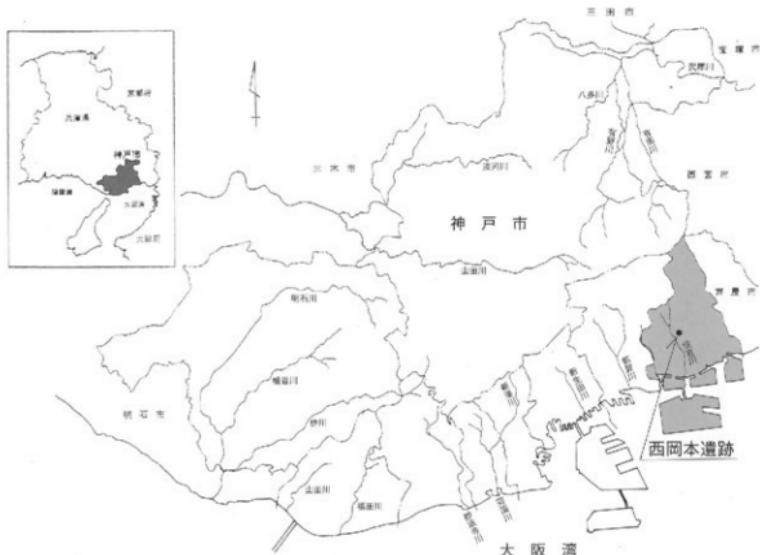
# 第Ⅰ章 はじめに

## (1) 位置と環境

西岡本遺跡は、神戸市東灘区西岡本5・6丁目に所在し、六甲山系を源とする住吉川の上流左岸高位段丘上に立地している。現在の神戸市南東部、大阪湾に面し六甲山系がせまる狭隘な平野部は、古代の行政区域としては攝津国兎原郡とされ、そのうちの住吉郷と考えられている地域である。〔角川地名1988〕

遺跡のある神戸市東灘区西岡本地区は、明治22年の市制町村制施行時、兵庫県武庫郡本山村となつた。それ以前は、尼崎藩領兎原郡野寄村であり、昭和25年に神戸市東灘区に編入され、東灘区本山村野寄となる。そして、昭和54年の町名変更により西岡本となった。これにより野寄の地名は、六甲山系の山野地の字名を除いて消滅したが、野寄公会堂、野寄公園、野寄公民館、野寄郵便局などにその地名が冠されて面影をしのぶことができる。〔角川地名1988〕

この野寄村の旧村落は、明治初期には明休寺を中心にして、北は今回の調査地付近から南は野寄公園までの魚崎から住吉川河谷を結ぶ里道沿いにひらけていた〔陸軍測量1911〕が、明治37年久原房之助が野寄村の南西部に壮大な邸宅を構えたのを皮切りに、明治40年に村の北側山腹を開いてドイツ人ヘルマンが別荘を建て住宅開発が開始された。その後、西岡本遺跡第1次調査地に当たる地に、ドイツ人ブレンが邸宅を設け〔浅岡俊夫2001〕、さらに今回調査地の北側には大正初期には洋風モダンの阿部邸が建てられている。このように西岡本地区は神戸市内でも屈指の邸宅地として早くに開発されたが、本格的には昭和8年の区画整理事業によってほぼ現在の町並みが完成されたとみられる。



第1図 調査地位置図

西岡本遺跡は、昭和30年代には横穴式石室の群集墳野寄古墳群の所在地として知られ、昭和40年代後半、現在の甲南大学テニスコート付近の造成工事において古墳時代～弥生時代の遺物が発見された以外は、明治時代から宅地化が進行したため、長らく遺跡の実態を明確にする調査は実施されてこなかった。昭和63年12月から実施された西岡本6丁目におけるマンション建設に伴う発掘調査において古墳13基を含む旧石器時代から近世・近代までの遺構・遺物が発見された〔浅岡俊夫2001〕のを端緒として、宅地化されたなかで古墳等が発見されつつあるのが現状である。

## (2) 調査に至る経過

平成21年10月、西岡本5丁目7-8における三井不動産レジデンシャル株宅地造成工事計画を受けて試掘調査を実施した結果、ピットの検出とともに土師器・須恵器が出土し、この結果を受けて教育委員会は、発掘調査を含めた保存処置が必要である旨の回答を行い工事原因者である三井不動産レジデンシャル㈱と協議を行った。造成工事の中で遺跡が影響をうける掘削部分450m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することとなった。

もとより当該地は第2次調査地の南側に隣接し、岡本北遺跡第2次調査地に西側街路を隔てて100mに位置し、何らかの弥生時代から古墳時代の遺構が検出されると予想できた。今回調査の結果、奈良時代～平安時代前期に建てられた掘立柱建物6棟とそれらの建物が建てられた際に造成された盛り土が検出された。そして造成土の下の地山面で、造成時に削平された弥生時代終末期から古墳時代後期の土坑等が検出された。



第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

神戸市の東南部に位置する大阪湾岸地帯の地形は、明石海峡・播磨灘に臨む神戸市西部明石川流域の地形とは趣をかなり異にしている。海岸から内陸に向けて低地が展開する明石川流域に対し、六甲山が海にせまる坂の町神戸の市街地では、おのずと立地する遺跡もその条件下に形成され、遺跡の歴史的性質もその地理的条件のなかで育まれたとみることができる。西岡本遺跡、この大阪湾を南に望み、六甲山の山麓に位置する遺跡周辺の地形の成り立ちを概述して遺跡の歴史的意義を考える一歩とした。



第3図 住吉川流域の地形

さて、西岡本遺跡の背後にせまる六甲山は、地下深くで形成された花崗岩でできている。第四紀、百万年前以後の六甲変動と呼ばれる地殻変動によって最高部が900m以上にいたるまで隆起し、現在も変動を続いている。この変動によって複数の断層が北東から南西に向かって主稜線と平行に走り、これらの断層はいずれも北西側が東に動く右横ずれ断層であり、同時に北西側が高くなる傾向がある。この地殻にかかる側方からの圧力により、基盤が上向きに隆起して六甲山を形成したと考えられている。この六甲山の造山活動は、その北・西側や山頂部ではひっぱられて比較的平坦な斜面、所謂隆起準平原を形成し、神戸市西区から加古川地域にかけて広い高位段丘面を生成する。いっぽう東・南側では、芦屋断層・五助橋断層・古々山断層などによってできた断層崖を含めて阪神平野の北を限る屏風のように急峻な山地となっている。特に神戸市側最高点標高931mの南側では急傾斜が連続して大阪湾にのぞみ、その間に幅数キロメートルに満たない扇状地の複合した海岸平野を抱いている。〔兵庫県1974〕

以上のような形成をみた六甲山南麓の地形は、数十の断層崖を埋没させつつ浸食がすすみ流路の短い河道を南北に走らせ大阪湾に注いでいる。なかでも西岡本遺跡の西を南北流する住吉川の上流は、五助橋断層に沿って南西方向に流れる断層谷であり、山塊を深く浸食・分断して、五助橋断層の露頭がみられる五助堰堤で南へ向きを変え、平野部に入ってわずか2.5kmで大阪湾に注いでいる。この住吉川は、六甲山の山頂南側を源流とするため、高低差により発生する急流が軟弱な花崗岩疊等の土砂を多く下流に運び、なだらかな扇状地を形成した。後年この住吉川沿いでは、集落が立地するなか、氾濫予防の堤防が築かれたため、上流から運ばれた土砂が中下流域で堆積範囲の集中がみられ、河床が上昇し天井川となっていったと考えられている。

西岡本遺跡は、住吉川の生成した上位扇状地の扇頂部からやや南に下った扇央部に位置している。この扇央部は、伏流水による湧水帯を形成する扇端部が集落および水田が立地する好適地であるのに対し、地下水位が低く乏水地で、一般に畑作・果樹栽培に利用され、それにも引水施設の構築が必要な土地と考えられる。近世以後この西岡本地区一帯で水車による綿糸油生産が広く行われた〔浅岡俊夫2001〕事実はそれを物語るものと考えられる。なお、この上位扇状地における扇端部は、現在の阪急神戸線の南側付近（標高50m等高線）とみられ、当地域の水田化可能地がこの付近にあったものと考えられ、当地域の条里型地割の北限界にあたる。

## 第2節 歴史的環境

神戸市東灘区は旧攝津国菟原郡の中央部を占め、原始古代の多くの遺跡が確認される地域である。

### 旧石器時代

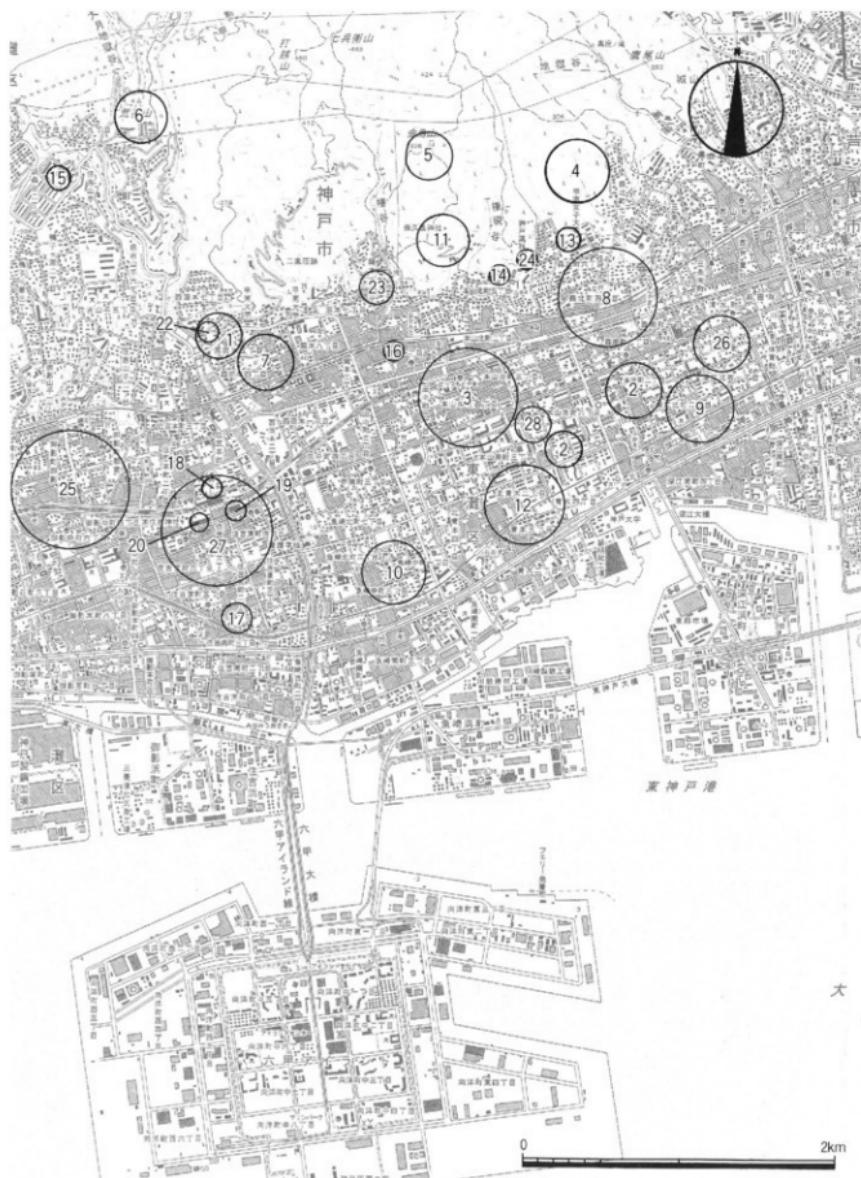
まず東灘区における人類最初の足跡として確認できる遺跡は、今回発掘調査を実施した西岡本第8次調査地の北西部で実施された第1次調査において後期旧石器時代のナイフ形石器が検出されている。

### 縄紋時代

縄紋時代には西岡本遺跡第1次調査において早期の住居址が発見され、それにともなう土器・石器が多量に出土した。

### 弥生時代

弥生時代には本庄町遺跡・本山遺跡などで前期～中期の集落が確認され、中期後半～後期には東山遺跡・金鳥山遺跡である高地性集落、岡本北遺跡・森北町遺跡・本山遺跡・深江北町遺跡・魚崎中町遺跡などで集落・墳墓が確認されている。西岡本遺跡の東方の金鳥山中腹には銅戈が出土し祭祀遺跡と考えられる保久良神社遺跡があるほか、本山・北青木・森・生駒・堂ノ上の各遺跡で銅鐸が出土しており、



第4図 西岡本遺跡周辺の遺跡

銅鐸出土地の密度の高さが注目できる。

### 古墳時代

古墳時代前期には、阪急岡本駅前西側にあった前方後円墳ヘボソ塚古墳、住吉川右岸には東求女塚古墳が築造される。中期～後期には住吉川下流右岸に前方後円墳坊が塚古墳、帆立貝式古墳住吉東古墳を中心とする住吉宮町古墳群が形成されている。横穴式石室を主体とする後期群集墳は、西岡本遺跡第1次調査で確認された野寄古墳群、岡本梅林古墳群、生駒古墳などがある。

### 奈良時代～平安時代

このように、西岡本遺跡周辺には後期旧石器時代から古墳時代まで連綿とした人々の生活の痕跡がみとめられるが、今回西岡本遺跡で発見された奈良時代から平安時代の建物群に関連する同時代には芦屋市・東灘区において注目すべき遺跡が発見されている。一つは住吉川右岸の郡家遺跡であり、もう一つは現在の芦屋市と神戸市境に隣接する芦屋市津知遺跡と深江北町遺跡である。

郡家遺跡は住吉川がつくった下位扇状地扇端に立地する。昭和53年御影町郡家大歳における住宅建設に伴う発掘調査で真北方向の南北棟大型掘立柱建物が検出され、時期は奈良時代と考えられた。〔喜谷美宜1992〕引き続いて昭和61年には昭和53年度調査地の西側で3棟の大型掘立柱建物が検出され、当該地に奈良時代の大型建物群が広がりをみせることが明確になった。〔丸山 潔1989〕また御影町下山田では、大型掘立柱建物3棟が「コ」字形に柱筋を並べて検出され、奈良時代～平安時代前期に計画的な建物群の存在があったことが明らかになった。このような大型掘立柱建物群の存在と、遺跡が所在する地域が「大歳」・「郡家」の地名をもつことから、郡家遺跡が兎原郡衙の候補地の一つの遺跡として考えられている。

津知遺跡は芦屋市の南西部に所在し、平成5年に平安時代前期の軸線を真北に採用する掘立柱建物4棟や奈良時代から平安時代前期の瓦・墨書き土器・縁釉陶器・円面鏡などの遺物が出土し、推定山陽道が遺跡の南側を通過することなどから、葦屋駅家もしくは兎原郡衙に比定されている。〔森岡秀人1999〕津知遺跡の南、神戸市域の深江北町遺跡は津知遺跡に継続する遺跡として、平成12年にマンション建設に先立って発掘調査された。調査では大型掘立柱建物7棟が検出され、須恵器・土師器・越州窯系磁器・灰釉陶器・縁釉陶器・円面鏡・軒串・鳥形・人形・墨書き土器とともに木簡が出上した。中でも墨書き土器のうちには「驛」と墨書きされた土器片が確認でき、津知・深江北町の両遺跡を葦屋駅家とする根拠となっている。〔山本雅和2002〕

これら3遺跡の他、住吉宮町遺跡第1次調査〔丹治康明・須藤 宏1992b〕・森北町遺跡第8次調査〔丹治康明・須藤宏1992a〕で奈良時代の掘立柱建物が確認されている。また、平安時代中期に降る例として本山中野遺跡第3次調査において掘立柱建物4棟、井戸を検出し、須恵器・土師器・縁釉陶器・黒色土器が多量に出土している。〔須藤宏2009〕

以上のように、特に弥生時代以降、住吉川流域は兎原郡の中心地域として開発が進んできたことがうかがえる。そして、奈良時代の兎原郡には、加美郷、芦原郷、佐才郷、住吉郷、覚美郷、天城郷、津守郷、布敷郷の八郷が置かれた。〔池辺 彌1966〕住吉川流域については、兎原住吉神社（現本住吉神社）を擁する下流部右岸から上流部左岸を住吉郷、上流部右岸を覚美郷とする説が有力であり、西岡本遺跡の属する岡本・野寄地域は、住吉郷と称される地域であったと考えられている。〔角川地名1988〕

地図番号	遺跡名	主要遺構・遺物	主要時期	主要文献
1	西岡本遺跡	堅穴住居・横穴式石室埴	後期旧石器時代～近世	浅岡俊夫2001
2	木本町遺跡	貯蔵穴・堅穴住居・水田	縄文時代後期～平安時代	中尾さやか2003
3	木本遺跡	銅鐸・堅穴住居	弥生時代前期～中期	須藤 宏1992・岩田明広1998
4	東山遺跡	堅穴住居・焦土坑	弥生時代後期	宮本都夫1987
5	金鳥山遺跡	堅穴住居・焦土坑	弥生時代後期	石野博信1962
6	愛宕山	堅穴住居・焦土坑	弥生時代後期	長瀬周教委1970
7	岡本北遺跡	堅穴住居・掘立柱建物	弥生時代後期～鎌倉時代	村上逸明・小林健一1998
8	森北町遺跡	掘立柱建物・堅穴住居・周溝墓	弥生時代中期～鎌倉時代	西岡巧次1987・山本雅和・須藤 宏1992a
9	深江北町遺跡	掘立柱建物・軒丸瓦出土	平安時代前期～平安時代後期	岩田明広1996a
10	魚崎中町遺跡	周溝墓・水田	弥生時代後期～奈良時代	柳口清之1941
11	保久良神社遺跡	祭祀遺跡・翁戈	弥生時代	
12	北青木遺跡	集落・銅鐸	縄文時代晚期～弥生時代中期	東喜代秀2009
13	森遺跡	銅鐸	弥生時代	三木文雄1969
14	牛駒遺跡	銅鐸	弥生時代	村川弘洋1965
15	越ヶ森遺跡	銅鐸	弥生時代	梅原未治1935
16	ヘボゾ塚古墳	前方後円墳・鏡	古墳時代前期	梅原未治1925
17	東赤女塚古墳	前方後円墳・鏡	古墳時代前期	梅原未治1926
18	坊が塚古墳	前方後円墳	古墳時代後期	資本宏明2000
19	佐吉東古墳	帆立貝式古墳・形象埴輪	古墳時代後期	丹治康明・須藤 宏1992b
20	佐吉西町古墳群	方形埴輪	古墳時代中期～後期	安田 達2001
21	小寺大町遺跡	ビット・祭祀遺構	縄文時代後期～奈良時代前期	井尻 格2004
22	野寄古墳群	横穴式石室	古墳時代後期	浅岡俊夫2001
23	岡本極林古墳群	横穴式石室	古墳時代後期	吉井貞秀1913
24	牛駒古墳	横穴式石室	古墳時代後期	神戸大考古1992
25	那家遺跡	掘立柱建物・堅穴住居	弥生時代後期～平安時代	喜谷美宜1992
26	津知遺跡	掘立柱建物	奈良時代後期～平安時代前期	森岡秀人篠1999
27	佐吉宮町遺跡	掘立柱建物・堅穴住居	古墳時代後期～奈良時代前期	丹治康明・須藤 宏1992a
28	木山中野遺跡	掘立柱建物	平安時代前期～平安時代後期	須藤 宏2009

第1表 西岡本遺跡周辺の主要遺跡一覧

### 第3節 既往の調査

#### (A) 西岡本遺跡第1次調査

昭和63年12月にマンション建設に先立つて実施された調査である。調査では、旧石器時代終末期に相当する細石器、縄文時代早期の堅穴住居2棟、弥生時代中期の土器、弥生時代後期の堅穴住居2棟、古墳時代後期の横穴式石室10基、方形埴輪2基、平安時代中期から鎌倉時代の掘立柱建物6棟、近世の水車関連遺構と近代に建てられた異人館(洋館)の基礎などが検出されている。〔浅岡俊夫2001〕

#### (B) 西岡本遺跡第2次調査

平成5年10月個人住宅建設に伴って今回の調査地から北西へ40m上った傾斜地において実施された調査である。調査では、東向きの前方後円墳と考えられる古墳の南半の一部を検出し、それに伴う埴輪樹立痕跡と共に、多量の円筒埴輪片・形象埴輪片・須恵器器台・甕・広口瓶・蓋坏が出土している。埴輪が確認された最初の土層において奈良時代の土器が出土しており、奈良時代には当該古墳のその姿は削平され失われたとみられ、〔富山直人1996〕奈良時代に大規模な土地造成が行われたことを示すと考えられる。出土須恵器の時期から5世紀後半に築造された野寄古墳群の主墳と考えられる。

#### (C) 西岡本遺跡第3次調査

平成7年11月住宅建設に伴って今回の調査地から北西へ130m、第1次調査地の東隣で実施された調査である。調査では、古墳時代初頭の堅穴住居1棟、古墳時代中期～後期の土坑・溝・ビット・性格不明の落ち込み、中世と考えられるビットが検出された。〔西岡誠司1998〕中でも性格不明の落ち込み内からは、須恵器高坏6個体、把手付坑1個体、土師器高坏2個体、管状土錐6点が一括で出土し、その形態から伊予産の非「陶邑系」の須恵器と考えられている。〔神戸市教委1999〕なおこれらの一括土器は5世紀後半前に比定される。

#### (D) 西岡本遺跡第4次・第5次・第6次調査

平成13年～14年、平成19年と継続して実施された、本山浄水場内における上水道および浄水施設建設

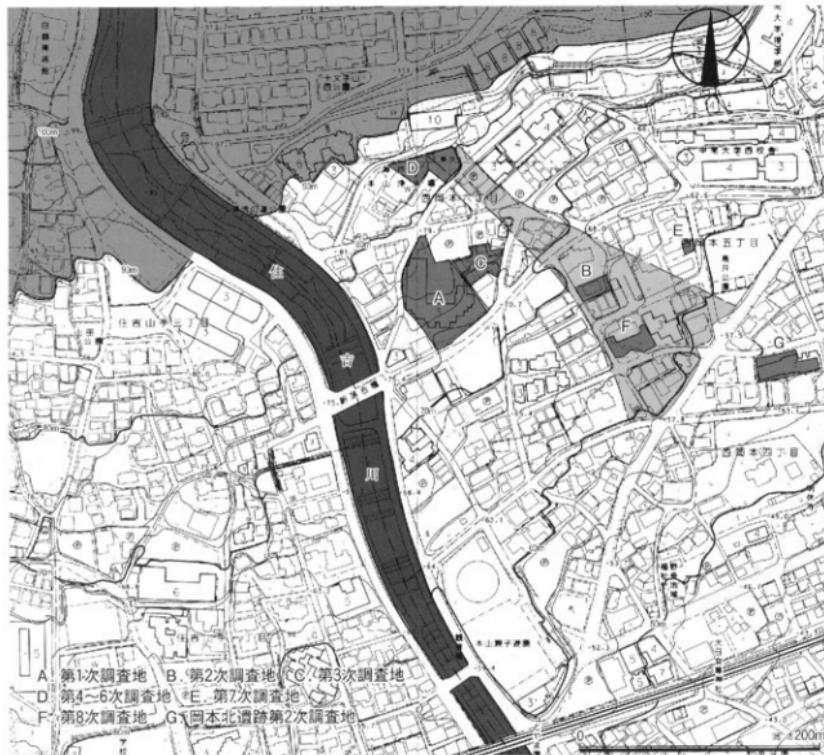
に伴って実施された調査である。今回の調査地から北西へ270m、第1次調査地の北西隣にあたる。調査では平安時代中期～中世初頭の掘立柱建物や土坑など集落を構成する遺構が検出され、東側谷状地形からは多量の遺物が出土している。遺構面に露頭する転石には石材加工の痕跡が残り、金属工具類、鉢、輪羽口などの出土から、採石・加工を生業とする集落であったみられている。〔藤井太郎2009〕なお、この検出された谷地形部は、微地形の検討から現在の浄水場東側から南東に展開する沢状の地形に合致するものとみられる。

#### (E) 西岡本遺跡第7次調査

平成20年6月に実施された個人住宅建設に伴う発掘調査である。今回の調査地から80m北東部に位置している。調査では古墳時代前期の遺物包含層とその下に土坑5ヶ所が確認されている。〔浅谷誠吾2011〕

#### (G) 岡本北遺跡第2次調査

平成7年11月に実施された震災復興事業のマンション建設に伴う発掘調査である。今回の調査地から東100mに位置している。弥生時代終末期～古墳時代初頭の堅穴住居11棟、高床倉庫と考えられる柱穴群、鎌倉時代の掘立柱建物3棟が検出されている。第7次調査を含め西岡本遺跡の東部は古墳時代初頭前後、もしくは鎌倉時代の集落遺跡として岡本北遺跡と重複していると予想された。



第5図 西岡本遺跡周辺の地形と調査地

## 第Ⅲ章 調査の概要

### 調査の経過と層序

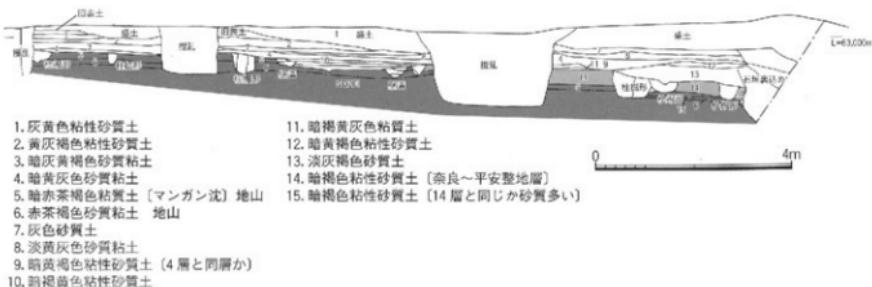
調査地内は、北・西側接道部から南に緩やかに傾斜し、南側接道部手前は段状に約1.5m落ちこんで平坦面となっている。調査は工事掘削による影響のない南側接道部と、昭和20年代にあった邸宅によって削平されたと考えられる北側接道部分を除く区域で発掘調査を実施した。

調査は重機により造成土および旧耕作土を除去し、遺物包含層上面を追求検出することから開始した。結果、調査区の北側約4分の1は既存の邸宅基礎掘形によって壊滅し、南側端部は東西に自然石を用いた石垣が段落ちに築かれ、旧状を残していない。

調査区の北端で約15cm前後、南端で80cm以上の造成土により盛土されているが、調査区北端では、現地表下50cm、南端では90cmで灰黄褐色粘性砂質土の遺物包含層を確認した。この灰黄褐色粘性砂質土層内からは、弥生時代から中世までの遺物が出土している。

この遺物包含層の下層は、北部では暗赤褐色粘質土の遺構検出面としてひろがるが、南部では暗褐色粘性砂質土、南端部では暗褐色粘性砂質土の上に淡灰色砂質土が被覆している。この暗褐色粘性砂質土上面において柱掘形等の遺構を検出した。遺構面となる暗褐色粘性砂質土層からは、奈良時代須恵器・土師器・弥生土器が混在して出土し、上面で検出した掘立柱建物の構築時に造成された整地層と考えられた。(第1遺構面)

この整地層を除去すると、全体に調査区の中央が比較的高く、西南・東南へゆるやかに傾斜し、中央部では旧耕作土直下に暗赤褐色粘質土の地山面となる。西南部および東南部では暗赤褐色粘質土もしくはその下層の赤茶褐色砂質粘土を遺構面としている。この地山面で奈良時代の土坑や弥生時代後期の住居址および土坑・性格不明の落ち込み等を検出した。(第2遺構面)



第6図 調査区東壁土層断面図

## 第1節 検出遺構

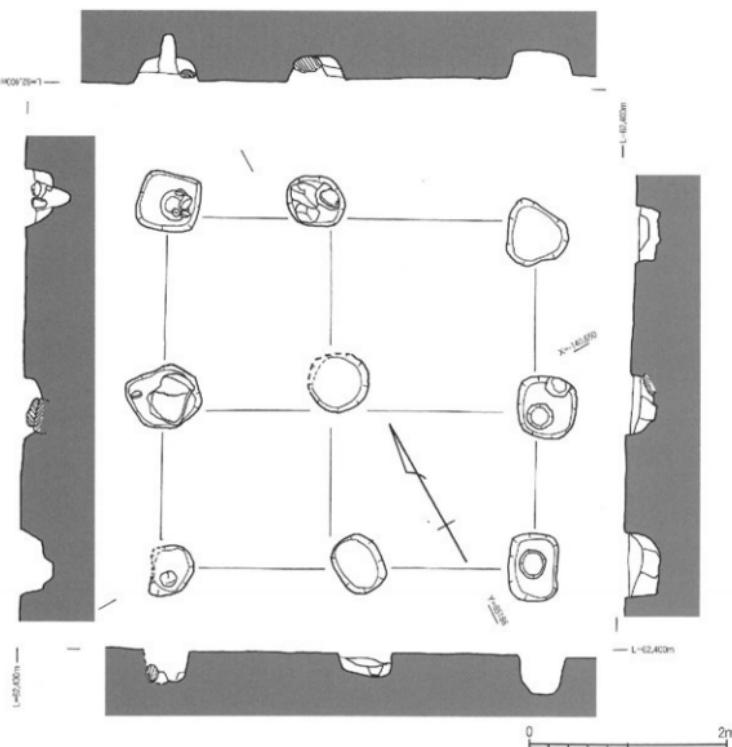
### (1) 第1遺構面

第1遺構面では掘立柱建物5棟、柵列1条を検出した。

#### (A) 掘立柱建物

##### SB01

調査区南東部で検出した東西3.6m、南北3.6m、2間×2間の掘立柱建物である。棟方向は明らかでないが、建物の方位は北62°西である。柱間隔は南北で1.8m等間、東西では南側で1.8m等間、北側で東より2.1m+1.5mでやや間柱が西に偏る。柱掘形は概ね一辺50cm～60cmの方形に掘り下げているが、やや不整形である。掘形の深さは、隅柱で30cm前後、間柱で20cm前後を計測し、間柱がやや浅く設えられている。なお、SB01の西側間柱はSB02南西隅柱の掘形を切って掘られており、SB03廃絶後にSB01は建てられたと考えられる。柱掘形内より須恵器高台付壺底部(2)、土師器壺A口縁体部(1)が出土している。



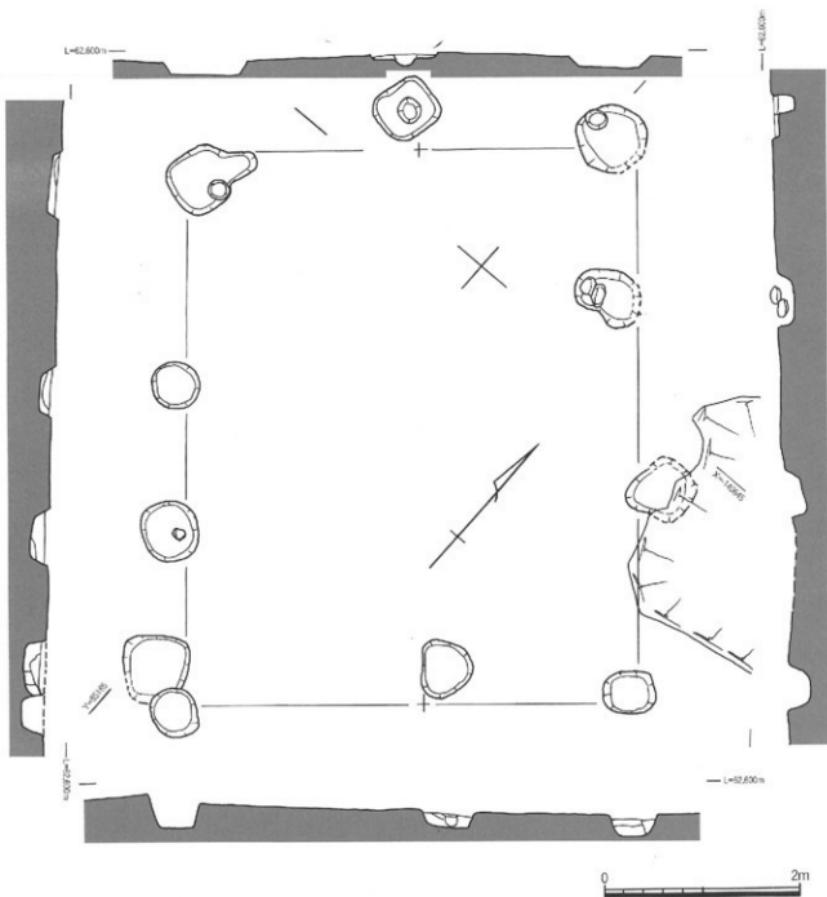
第7図 SB01平面図及び断面図



第8図 第1遺構面遺構配置図

**SB02**

調査区南東部で検出した東西4.8m、南北5.6m、東西2間、南北3間の南北棟の掘立柱建物である。建物方向は北40°西である。柱間隔は西側桁行で北から2.4m+1.5m+1.7m、東側桁行で北から1.5m+2.1m+2.0m、南側梁行で西から2.7m+2.1m、北側梁行で2.4m等間、棟柱が北側で約50cm外側に、南側で約50cm内側にずれる。柱掘形は一辺60cm~70cm前後の方形もしくは長径50cm前後のやや不整形の楕円形をしている。掘形の深さは、北側で15cm前後、南側で25cm前後を残し、隅柱で比較的深い傾向にあるが、



第9図 SB02平面図及び断面図

相当な削平を被ったと推定される。また南西隅柱は方形柱掘形に柱を据えたあと、長径40cmの柱掘形にして柱を据え替えている。柱掘形内から須恵器壺B底部片(3)、壺A底体部片(4)が出土している。

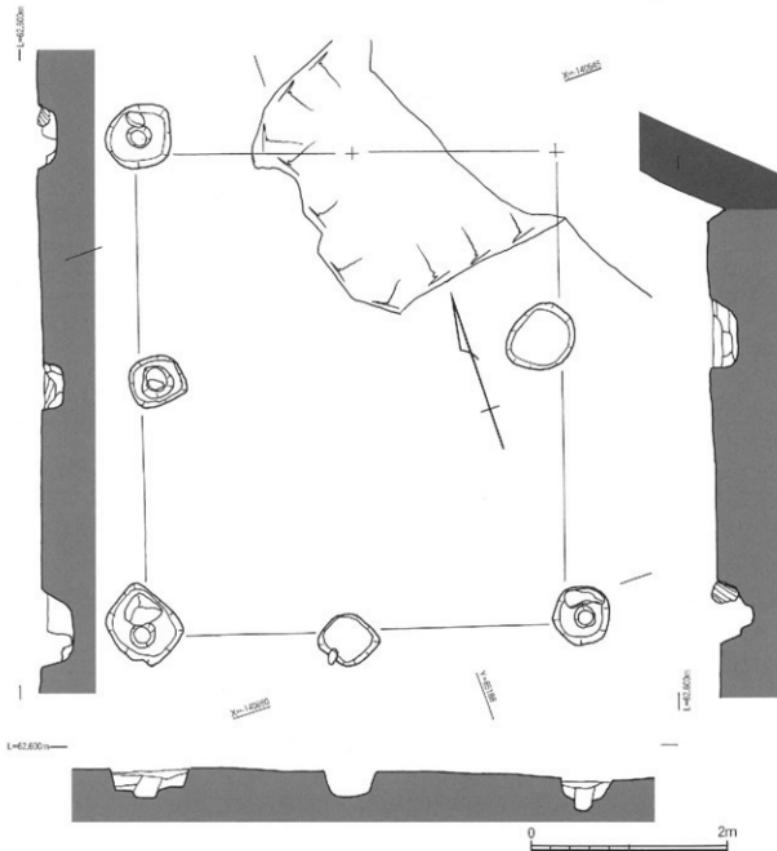
### SB03

調査区南東部で検出した東西4.2m、南北4.8m、2間×2間の掘立柱建物である。掘立柱建物の北東部においては、隅柱が調査区外に、北側間柱は現代の擾乱によって欠失している。棟方向は明らかでないが、長辺方向を棟方向とすれば北20°東である。柱間隔は梁行南側で2.1m等間、桁行西側で2.4m等間、東側で北から1.8m+3.0mと推定される。柱掘形はやや不整形であるが一辺60cm前後の方形に掘り下

げている。なお北西隅柱はSB02の桁柱掘形を切って掘られており、SB03はSB02廃絶後に建築されたと考えられる。柱掘形内より上製支脚と考えられる上製品(5)が1点出土している。

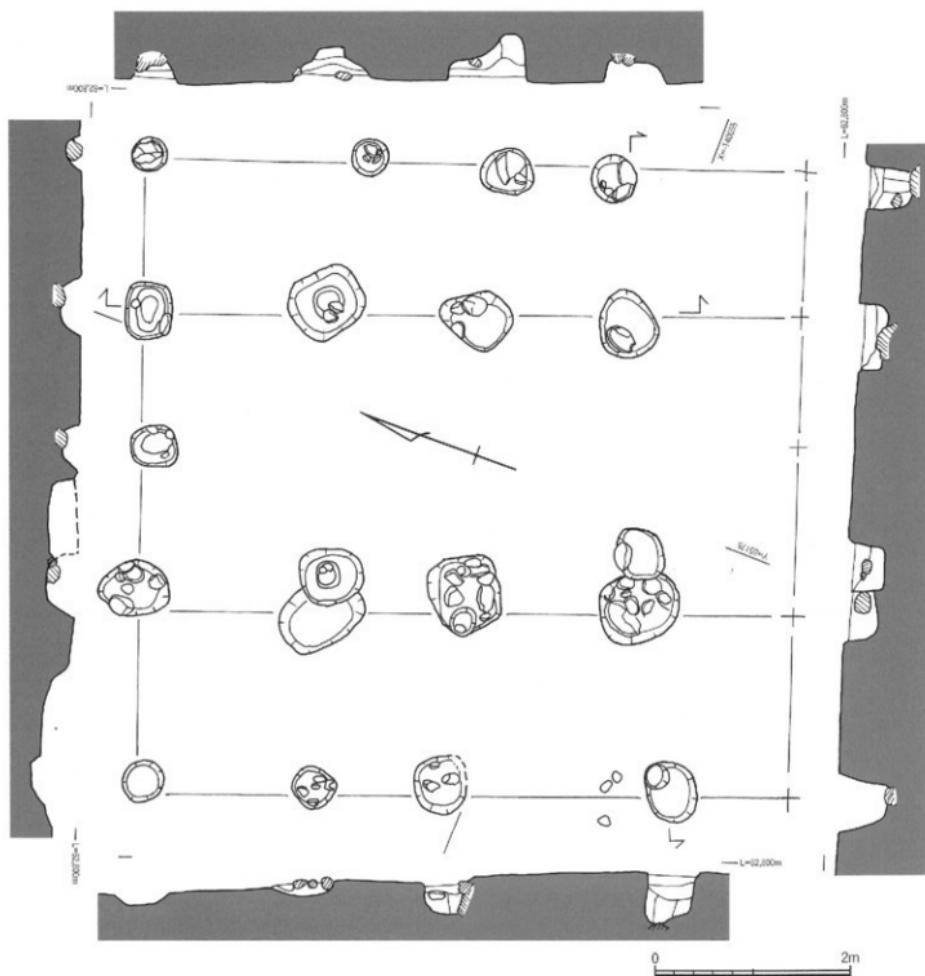
#### SB04

調査区中央南よりで検出した東西6.5m、南北5.5m以上、4間×3間以上と推定される東西棟の大型掘立柱建物である。西側に1.9m、東側に1.5m出る庇を設え、東西2間、南北3間以上の身舎を構築していたと推定される。南側は後世の宅地造成により段状に削平を被り滅失している。建物の方向は棟方向で北21°西である。検出した柱掘形の柱間隔は、北側梁方向で1.9m+1.7m+1.5m+1.5m、身舎部棟方向で東側・西側とも1.7m等間と推定される。庇の棟方向での柱間隔は東側で北から2.3m+1.5m+1.2m+(推定)2.1m、西側で1.8m+1.5m+2.4m+(推定)1.2mと推定される。なお身舎における棟柱の位置は北

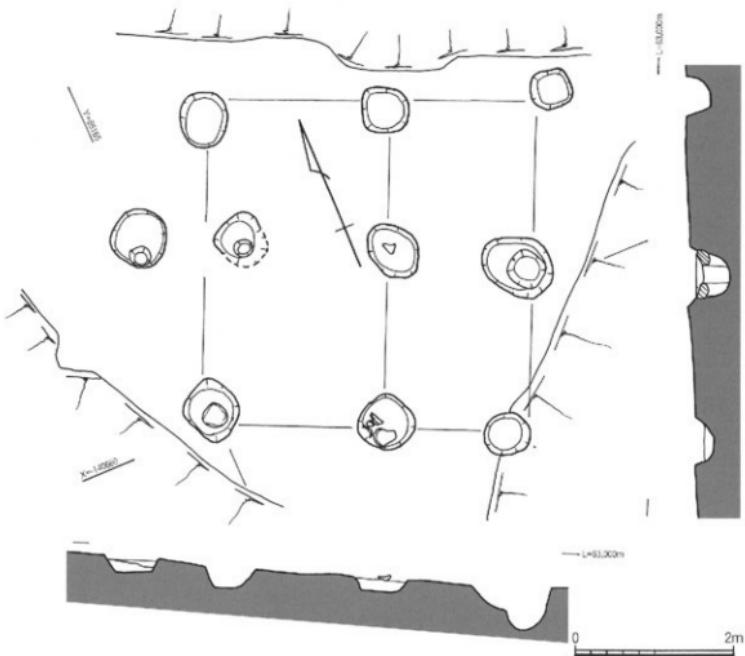


第10図 SB03平面図及び断面図

備梁行において確認できるが、西側1.7m、東側1.5mを計測し、庇の出とともにやや西流れの屋根構造が推定できる。柱掘形は、柱の抜き取り痕によって不整形となってはいるが、身舎の柱掘形が一辺60cm～80cm前後の方形掘形、棟柱が一辺50cmの方形掘形を設けている。庇柱は直径30cm～60cm前後の円形もしくは不整格円形の掘形である。柱掘形の深さは建物北側の柱で25cm前後、南側の柱で50cm前後残し、掘形を設ける地盤が北側では地山であるのに対して、南側は軟弱な整地層であるために深い掘形が設え



第11図 SB04平面図及び断面図



第12図 SB06平面図及び断面図

られたと考えられる。また、一部の柱掘形ではあるが、掘形底に比較的平坦な自然石を据え礎盤とし、埋土には土砂とともに自然石を充填して柱を据えたと考えられる柱掘形もある。柱掘形内より、須恵器蓋片(7)、土師器甕口縁部(11)、堀口縁部(12)が出土している。

### SB06

調査区西南端で検出した南北3.4m、東西3.4m、2間以上×2間以上の東西棟の掘立柱建物である。当初検出した時点では2間以上×3間以上で北梁に棟持柱を想定したが、柱間距離等の検討から確定できない。建物の方向は棟方向で北64°西である。柱間隔は身舎梁行で1.8m、身舎梁行が西より1.8m+1.5mである。西側棟柱は50cm前後外に突出する柱と内側に入りこむ柱があり、柱の建替えが考えられる。柱掘形は一辺40cm～50cmの方形、もしくは長径60cm前後の楕円形掘形である。柱掘形の深さは柱の柱掘形で30cm前後残し、隅柱が20cm前後を残すのに対して、間柱は50cmを残存させている。建物中央の支柱内から須恵器坏身片(6)、土師器甕口縁部片(7)が出土している。2間×2間の小型建物もしくは東西もしくは南に展開する大型建物の北隅部と考えられる。

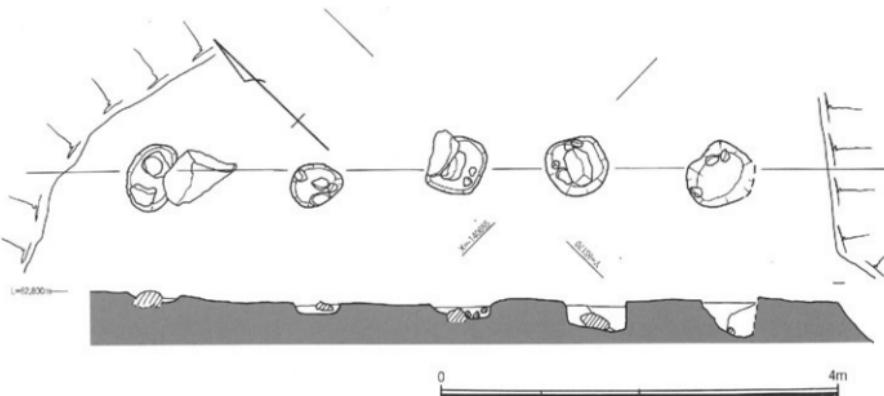
**SB07**

現地での調査時には確認できなかった掘立柱建物である。調査後、下層検出のピット、掘立柱建物群の出土遺物や建築方向等を検討するなかで確認できた。調査区東部で検出した南北50m、東西3.8m、2間×2間の東西棟建物と考えられる掘立柱建物である。建物の方向は棟方向で北28°西である。柱間隔は桁行東側で2.4m等間、桁行西側で北側2.7m、南側で2.1m、梁行北側で西から1.5m+2.1、南側で西から2.1m+1.5mとなっている。柱掘形はやや柱の抜き取り痕跡もあり、不整形であるが一辺50cm～60cm前後の方形に掘り下げている。柱掘形の深さは、梁間の間柱掘形で50m前後残し、桁行の柱掘形で30cm前後を残し、梁間の間柱を深く掘り下げている。桁行西側の側柱には直径50cm、厚さ20cm大の扁平な河原石を礎盤として用いている。なお、南西隅柱内から須恵器塊底部片(6)が出土している。

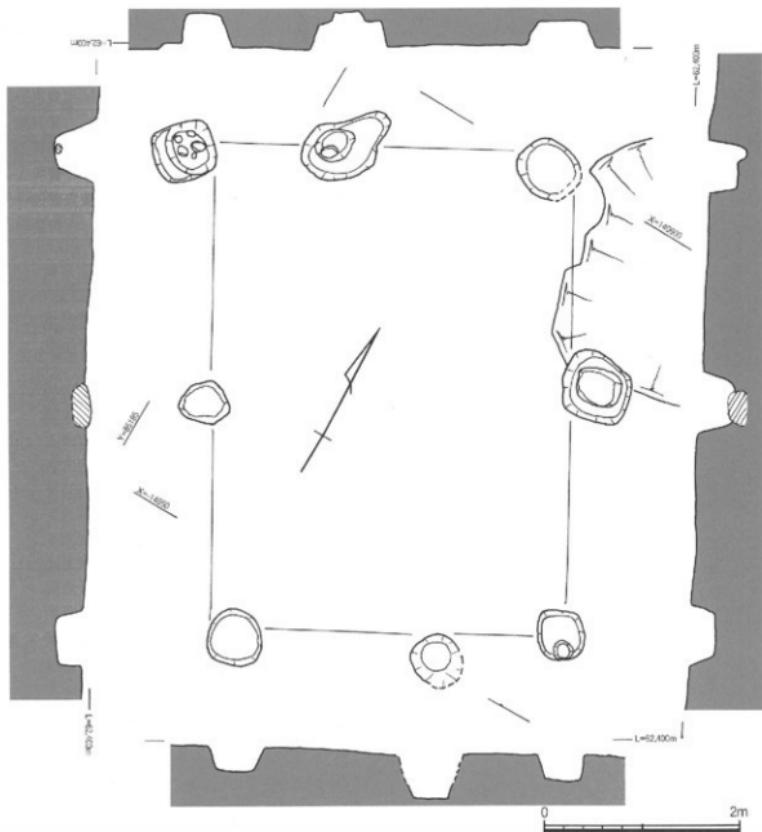
## (B) 棚列

**SA05**

調査区中央西よりSB04の西に接して4間分検出した柱列である。当初、掘立柱建物に所属する柱掘形列と考え、周辺の柱掘形の検索を行ったが、同一方向の柱掘形は検出できなかったことから棚列と考えられた。南東から北西方向に並び、方位は北44°西を探る。柱間隔は北から1.5m+1.5m+1.5m+2.0mである。柱掘形は一辺50cm前後の方形もしくは長径50cm～60cm前後の楕円形である。柱掘形の深さは北側で深さ5cmに礎盤石を残し、南に行くにしたがって徐々に深くなり南端の柱掘形では深さ40cmを計測する。SB04と同様に掘形を設ける地盤が北側では地山であるのに対して、南側は軟弱な整地層であるために深い掘形が設えられたと考えられる。柱掘形内から土師器甕口縁部片(8)が出土している。



第13図 SA056平面図及び断面図



第14図 SB07平面図及び断面図

## (2) 第2遺構面

第2遺構面では、竪穴住居址1棟、土坑7基、性格不明の落ち込み5ヶ所を検出した。また、第1遺構面から掘りこまれていたと考えられる柱掘形も検出した。

## (A) 竪穴住居址

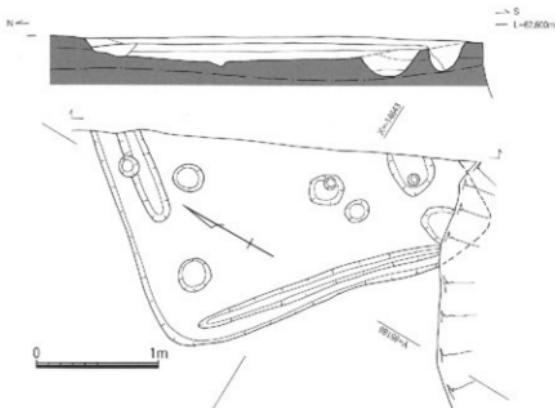
**SB201**

調査区東端北よりで検出した方形の竪穴住居址である。東側は調査区外となる。南北3.0m、東西2.0m以上を計測し、小規模である。暗赤茶褐色粘質土上面で検出した時点で方形にめぐる周壁溝2条を検出し、溝の内側は2層の床土が観察できた。周壁溝は隅部でとぎれ、溝の幅は北辺で20cm、西辺で15cmを



第15図 第2遺構面遺構配置図

測り、いずれも断面U字状である。床面から掘りこまれたと考えられるピット、柱掘形は6ヶ所あり、東壁に接する掘形は長径40cmと大型である。床土・壁溝内から土師器もしくは弥生土器と考えられる細片が出土している。



第16図 SB201平面図及び断面図

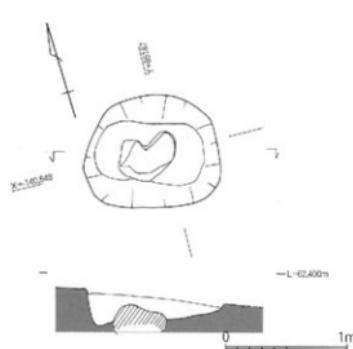
## (B) 土坑

## SK202

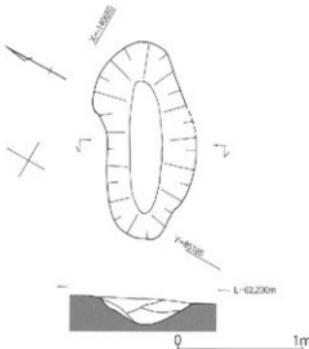
調査区南東部で検出した楕円形の土坑である。南北1.1m、東西0.9m、深さ南端で25cm、北端で5cmを計測する。断面形は船底状である。土坑底中央で長径60cm、厚さ20cmの花崗岩塊が据えられるように置かれていた。埋土である黒灰色粘性砂質土内からは、土師器、須恵器の細片が出土している。埋土内からは、須恵器塊口縁部(13)、土師器底部(14・15)が出土している。

## SK208

調査区南東部で検出した長楕円形の土坑である。東西1.6m、南北は東側で0.7m、西側0.5mを計測する。断面形は中央部で深い船底状をしていて、深さ25cmを計測する。埋土内からの遺物出土はない。



第17図 SK202平面図及び断面図



第18図 SK208平面図及び断面図

**SK203**

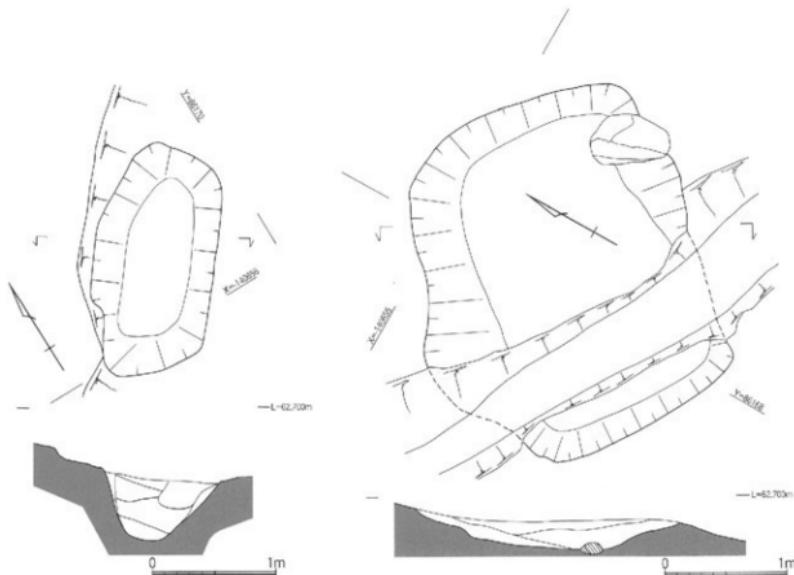
調査区西部南端で検出した長楕円形の土坑である。東西1.8m、東西1.0mを計測する。断面形は南側法面が緩やかな船底状をしていて、深さ60cmを計測する。埋土内から須恵器・土師器の細片が出土している。埋土内からは、土師器塊(16)、須恵器塊底部(17)が出土している。

**SK204**

SK205の西側に接して検出した円形の土坑である。直径0.6mを計測する。断面形は皿状をしていて、深さ15cmを計測する。土坑底西よりで径20cm、深さ10cmの円形ピットを検出した。埋土内から須恵器・土師器の細片が出土している。

**SK205**

調査区西部中央で検出した長方形の土坑である。長辺2.9m、短辺2.3mを計測するが、土坑西よりを南北に幅1.0m、深さ50cm前後の既存邸宅の下水管掘形によって切られ壊滅している。残存する深さは東端で30cm前後、西端で15cmを計測する。断面形は底部の平坦な船底状をしている。埋土内から須恵器・土師器の細片が出土している。

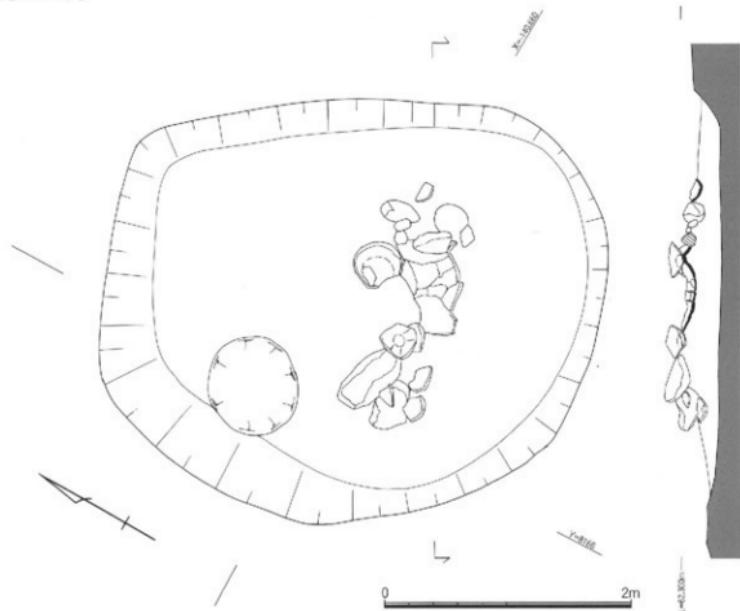


第19図 SK203平面図及び断面図

第20図 SK205平面図及び断面図

**SK206**

調査区西端で検出した楕円形の土坑である。長径(南北)1.0m、短径(東西)0.9mを計測する。断面形は皿状をしていて、深さは最深部で30cmを計測する。土坑の北側西よりには上層からのピットの掘りこみがみられる。埋土の最下層より約20cm上層で弥生時代後期から古墳時代初頭の土師器壺形土器の口縁部および体部1個体と壺形土器底部(21)、土師器壺形土器底部3点(18・19・20)が花崗岩片とともに出土している。



第21図 SK206平面図及び断面図

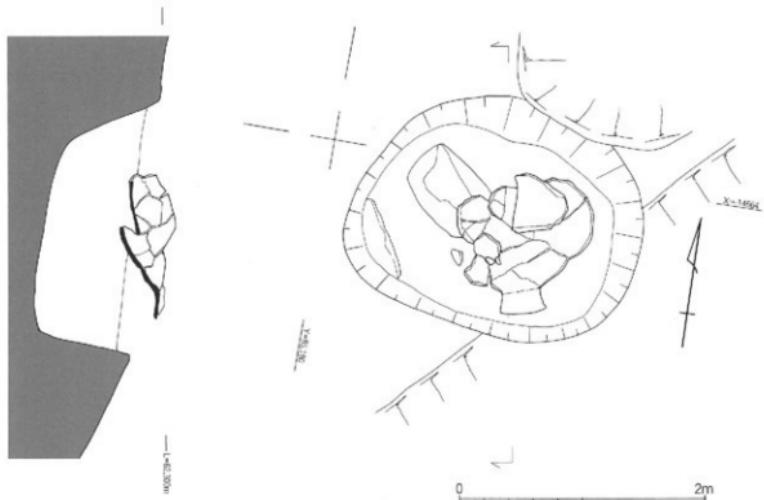
**SK207**

調査区中央南側段落ち沿いで検出した楕円形の土坑である。長径0.6m、短径0.45mを計測する。断面形は底部が平坦な船底状をしていて、深さは15cm前後を計測する。土坑の東側は上層造構の柱掘形によって切られている。土坑中央部に長方形の花崗岩塊があり、その上部に古墳時代後期と考えられる土師器壺形土器の口縁部・体部片(22)が出土した。

## (C) 性格不明遺構

**SX201**

調査区南東端で検出した弓形に東側に落ち込む性格不明の落ち込みである。南北2.5m、東西2.2m深さ20cm前後を測り、内部に転落石があるものの、底面は平坦でピット4ヶ所を検出した。落ち込みの南側は近代の造成工事によって滅失している。埋土内から土師器もしくは古墳時代前期の土器細片が出土した。



第22図 SK207平面図及び断面図

**SX202**

調査区南東部中央よりで検出した南側に落ち込む不明遺構と当初考えたが、明確な落ち込みはみられず、溝状の落ち込み1ヶ所とピット3ヶ所を検出した。溝状の落ち込みは延長1.5m、幅30cm～50cm、深さ10cm前後である。埋土内より土師器細片が出土した。

**SX203**

調査区中央東よりで検出した性格不明の落ち込みである。弧状に南北にのびる溝状を呈しており、幅1.1m～2.3mで南に行くにしたがってひろがる。断面形は皿状をして、底面は平坦である。深さは12cm前後を計測する。底面から掘りこまれた状態で、径30cm前後のピット3ヶ所を検出した。埋土内から土師器もしくは奈良時代の土師器壺口縁部片2点(23・24)が出土している。

**SX204**

調査区北東端で検出した、東西にのびる溝状遺構である。遺構の西側は、既存の邸宅基礎掘形によつて滅失している。幅0.6m～1.0mで西に向かってやや幅を広げる。断面形はやや上広がりのV字形をしていて、深さ20cmを測る。埋土は上面まで旧耕土もしくは造成土が堆積していたため、混入があるものの土師器もしくは古墳時代初頭の土師器壺底部片(28)、壺底部片(29)が出土している。

**SX205**

調査区南東部段状落ち込み端で検出した土坑状の落ち込みである。東西2.0m、南北2.0mであるが深さは10cm前後と浅い。土坑内には埋土とともに転石と考えられる花崗岩の石塊が多数みられる。埋土内からは須恵器壺口縁部(25)・蓋(26)・壺底部(27)片が出土している。

## 第2節 出土遺物

出土遺物は28ℓコンテナ11箱、ビニール袋にして248点出土している。

出土遺物には、上層の奈良時代以降の遺物包含層から出土した奈良時代～中世と考えられる須恵器・土師器類と、釘・刀子等の鉄器片やサヌカイト製の石器がある。石器は、後期旧石器時代に属する翼状剥片などナイフ形石器がふくまれる。調査区南辺に堆積がひろがる暗褐色粘性砂質土の奈良時代～平安時代整地層内からは、比較的大型の須恵器片が出土し、上層の遺物包含層とは性格を異にすると思われ、これらの須恵器が掘立柱建物群の成立時期の上限を明らかにする資料といえる。同整地層内からは古墳時代初頭～後期の土器も出土している。

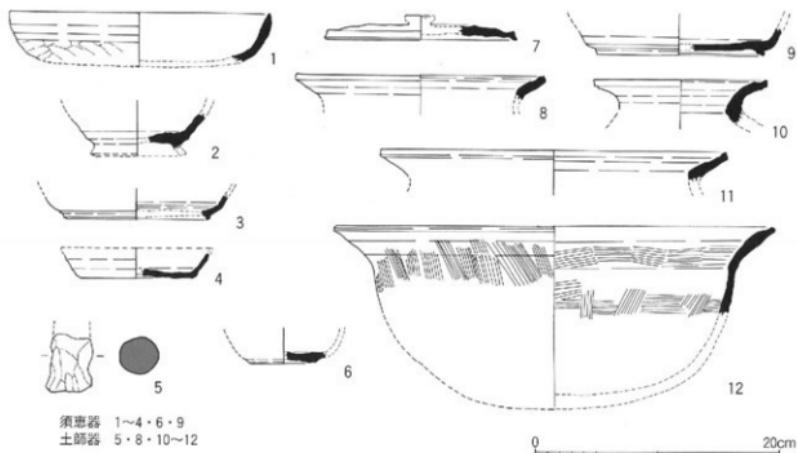
なお、土器類の概要を記述するにあたっては、古代の土器研究会編『古代の土器1』「都城の土器集成」〔古代土器1992〕における器種分類に則り記録・整理作業を行った。したがって、同一器種の場合、推定可能な限り復元を試みている。図上復元部分は破線で表示した。

### (1) 土器及び陶器類

#### (A) 掘立柱建物・柵列

##### SB01

土師器壺A(1)は、やや内弯気味にたちあがる口縁部に平底の底部をつけると考えられる。調整は外面で口縁部をナデ、体部下端と底部をハラケズリしている。内面はナデ調整を行う。須恵器壺底部片(2)は廉しと考えられる。大方は欠損するが、残部からみて、やや外に踏ん張る低い付け高台にやや扁球の胴部を設えると考えられる。底部内面は細かなロクロ目を残す。



第23図 掘立柱建物・柵列出土土器実測図

**SB02**

須恵器壺B(3)は、やや外に踏ん張る低い付け高台に直線的に立ち上がる体部を設える。高台は上方に少しつまみ出して、支点は高台内側におく。須恵器壺A(4)は直線的に立ち上がる体部にやや上げ底気味の底部をつくる。この上げ底部は、ヘラでおこしたままで未調整である。

**SB03**

土師質の棒状土製品(5)は棒状土製品の端部をヘラで削り、獸脚状に設える土製支脚と考えられる。

**SB04**

須恵器蓋(7)は平坦な天井部にやや屈折して、外下方にひらく蓋端部をつくる。土師器壺口縁部(11)は、短く外反して開く壺口縁部である。扁球形乃至は砲弾形の体部をつくっていると考えられる。土師器壺(12)は半球形の体部に外上方に緩やかに開く口縁部を設えている。口縁端部はやや上方につまみあげて面をつくる。内外面とも口縁部をのぞいて粗い刷毛調整を施す。

**SA05**

土師器壺口縁部(8)は短く「く」字に外反する壺片と考えられる。口縁端は丸く仕上げ、口縁内面は強くナデを行って四線状になっている。

**SB06**

須恵器壺B(9)は、直立する付け高台にやや間隔をおいて直線的に立ち上がる体部に口縁部をつくると考えられる。土師器壺口頸部(10)は、短く外反する頸部にまっすぐ上につまんで三角形状に設える口縁部をつくる。土師器としてつくられているが、須恵器壺の形態に似せてつくられる。

**SB07**

須恵器壺底部(6)は、板状高台に丸く内弯する体部を設える。切り離しはヘラで起こしたため、やや上げ底気味になっている。

## (B) 土坑

**SK202**

須恵器壺口縁部(13)は直線的に立ち上がる須恵器壺片と考えられる。古墳時代初頭の土師器壺底部(14・15)は円盤形底部にまでタタキを施す小型品である。

**SK203**

土師器壺(16)は、やや平底気味の底部に内弯して、口縁部付近で垂直気味に立ち上がり、端部は外反気味につまみ出す。調整は器壁が荒れていて詳細は不明である。須恵器壺底部片(17)は、やや上げ底気味の平たい底部に内弯気味に立ち上がる口縁体部を設えると考えられる。

**SK206**

古墳時代初頭、庄内式土器併行期と考えられる壺口縁体部片と底部片(21)である。出土状況と接合はできないが色調と胎土の状況から同一個体として図示する。底部からやや内弯気味に立ち上がり、やや重心を低くおく体部に「く」字に屈折して外反する口縁部を設える。口縁部は水平につまみだして断面三角形状につくり、上端に面を設える。底部は中央部がくぼみ輪高台状になっている。器壁の調整は口縁部下端から肩部までを一連のタタキ調整を行い、口頸部までをナデして消している。肩部以下は肩部までとは別方向の一連のタタキ調整を行っている。内面は横方向のヘラケズリを行う。(18・19・20)はいずれも壺形土器の底部片である。

**SK207**

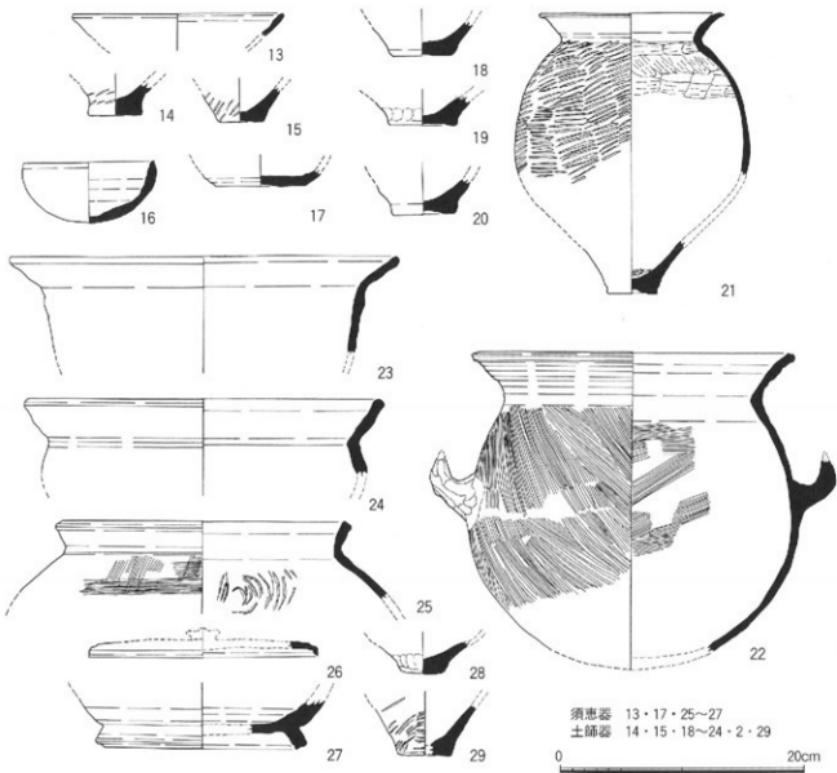
古墳時代後期の土師器壺形土器(22)である。ほぼ球形の体部に「く」字に屈折して外反する口縁部を

設える。口縁部はやや外下方につまみだして、上端に面をつくる。体部中央やや上気味に鍵形の把手を貼り付ける。把手の成形はヘラによって角状に粗く仕上げる。把手は2ヶ所に設えられたと考えられる。器面の調整は口頭部を強くナデて仕上げ、体部外面は頸部から下方に2・3段に別けていっきに刷毛調整を行う。内面は横方向の刷毛調整で仕上げる。

## (C) 性格不明遺構

SX203

土師器堀C(23)の口縁体部片である。底部にいくにしたがってすばまる長胴砲弾形の体底部をもつタイプである。内外面の調整は、器壁が荒れていて不明である。(24)は土師器堀Aの口縁体部片である。頸部下端に肩をつくり、半球形の体部を設える。内外面の調整は、器壁が荒れていて不明である。



第24図 土坑・性格不明遺構出土土器実測図

**SX204**

弥生土器もしくは古墳時代初頭の土師器底部2点が出土している。(28)は平底を指すサエによって成形する。小型の壺形土器の底部と考えられる。(29)はやや上げ底気味の平底の底部までタタキで成形する。壺形土器の底部と考えられる。

**SX205**

(25)は「く」字にやや上方に屈折して外反する短い口頸部に球形の体部を設える須恵器壺Bである。口縁端はやや下方に少しつまみ出して、外下方に傾斜する端面をつくる。器壁の調整は外面肩部では、カキ目の後、ハケ調整する。体部内面は、粗いタタキによる青海波文を残す。口縁部は内外面とも丁寧なナデ仕上げを行う。(26)は平坦な天井部をもつ須恵器壺口縁部片である。ほぼ直角に折り曲げて口縁部を設えている。(27)は外に踏ん張る短い付け高台を設える須恵器壺Lの底部と考えられる。体部は丸く仕上げるものと推定される。

## (D) 遺物包含層

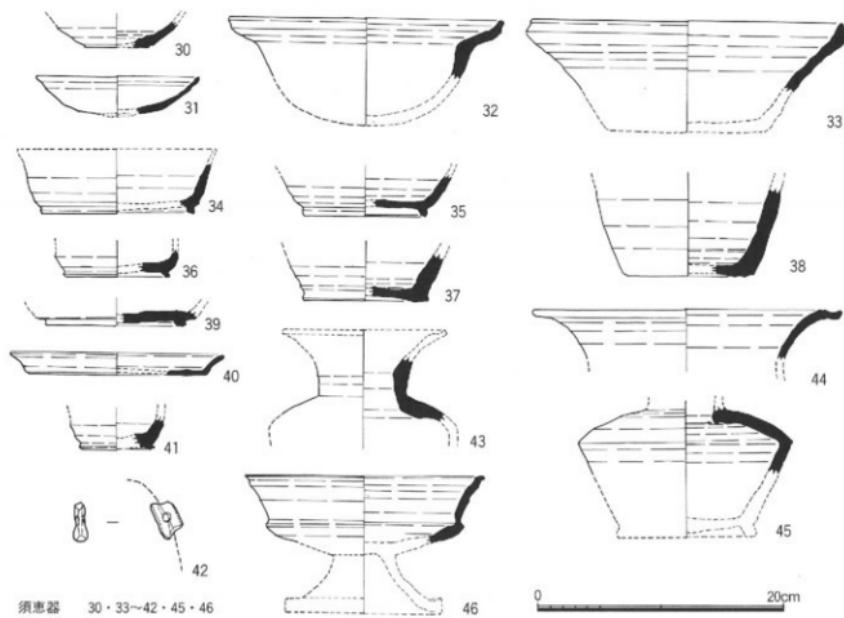
**上層遺物包含層**

(30)は小ぶりの板高台にまるく内弯する体部を設える壺である。底部の切り離しは糸切りによって行っている。(31)は瓦器の口縁体部片である。器形は扁平で底部に矮小化した三角形の高台を貼り付けるものと考えられる。外面ともヘラミガキ等の痕跡はみられない。土師器壺(32)は半球形の体部にやや上方に「く」字に屈折する口縁部をつけ、口縁部端を上方につまみあげて受け口に設える。須恵器捏鉢(33)は、外反気味に直線的に立ち上がる体部に、やや内側上方に摘み上げた口縁部を設えている。須恵器壺B(34)は直立する付け高台から、ただちに直線的に立ち上がる口縁体部を設ける。高台端部は内傾する面をもつ。須恵器壺B(35)は直立する付け高台から、ただちにやや内弯気味に立ち上がる体部を設ける。須恵器壺B(36)はやや外に踏ん張る短い付け高台から、ただちにやや内弯気味に直立して立ち上がる体部をもつ小型の壺と考えられる。須恵器壺B(39)は少し外に踏ん張る短い付け高台から、やや間をおいて体部を立ち上げている。壺底部(37・38)はヘラオコシによる切り離しによって、やや上げ底気味となっている。壺Nの底部と考えられる。壺A(40)は平坦な底部から外反する口縁を設ける。底部はやや上げ底気味となっている。壺底部(41)は外に踏ん張る短い付け高台に内弯して立ち上がる胴体部を設える小型品である。高台端部は内傾面をつくり内側を支点としている。(42)は壺Nの肩部に設えられる「耳」の破片と考えられる。直径8mm前後の穿孔のあるいた台形状の粘土板を貼り付けている。(43・44)は縁軸陶器壺の口縁・頸部と考えられる。(43)は壺L、(44)も口縁部が水平に外反させた壺口縁頸部である。(45)は壺K胴体部片と考えられ、胴部直下に短い脚部を設える形態と考えられる。(46)は古墳時代の須恵器無蓋高壺片である。口縁部と体部の境に鈍い稜をつくり、それから外上方に口縁部を外反させる。口縁端は少し外につまみ出し、上端に面を作り出す。

**整地層出土遺物**

須恵器壺Bには、丸い壺体部にやや外踏ん張りの付け高台をつくる(50・52)、外踏ん張りの短い付け高台から、ただちに内弯気味に口縁体部を立ち上げる(47・51)、直立する付け高台にその上端から直線的に口縁体部を立ち上げる(49)、やや外踏ん張りの短い付け高台から、すこし間をおいて内弯気味に体部を立ち上げる(53)がある。

須恵器壺A(48)は、体部と底部の境としてやや内弯気味に立ち上がる口縁部をつくる。底部はヘラオコシによって上げ底気味となっている。



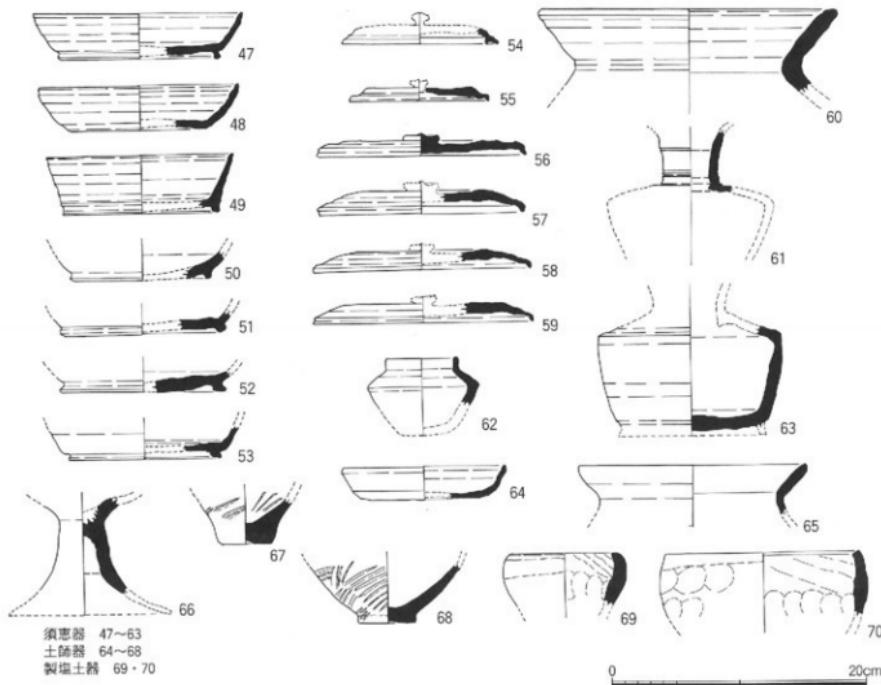
第25図 上層遺物包含層出土土器実測図

須恵器蓋には、丸みをもつ天井部に内面に受け部をつくる(54)、平坦な天井部に屈折する蓋縁部を設ける(55)、平坦で扁平な天井部に、やや外反する蓋縁部を設える(56)、ヘラオコシによりくぼむ天井部から、直線的に蓋縁部をつくりほぼ直角に断面三角形の端部を設える(57~59)がある。

須恵器甕口縁(60)は、「く」字に屈折する頸部から直線的にのびる口縁部を設える。口縁端部は少し水平につまみ出して上端に面をつくる。甕口頸部片(61)、甕胴部(63)は甕Kの破片と考えられる。(61)頸部に3条の沈線を巡らせる。(63)は、底部の脚部を欠くが、底体部直下に短い脚を設えるものと考えられる。甕(62)は小型の薬甕、甕Eの破片である。やや重心を上に置き胴部を肩部と体部の境を鋭い稜で画する。口縁部はほぼ直角に短く立ち上げ、端面はヘラケズリによって平坦な面をつくっている。

土師器壺A(64)は、小型の壺である。平坦な底部からやや内弯気味に立ち上がる体部をつくり、口縁部はほぼ直立させ、端部は強くナデて断面三角形に仕上げる。口縁体部はナデ、体部下端から体底部の境までをヘラケズリする。底部は丁寧なナデを行う。土師器甕口縁部(65)は「く」字に屈曲する口頸部に丸い胴部を設えると考えられる甕である。調整の状態は器壁が荒れていて不明である。

土師器(66)は古墳時代初頭頃と考えられる高壺の破片である。脚部は中空である。土器底部(67・68)は、底面を上げ底状に仕上げ、底部までタタキ調整を行う。いずれも古墳時代初頭の甕形土器と考えら



第26図 整地層出土土器実測図

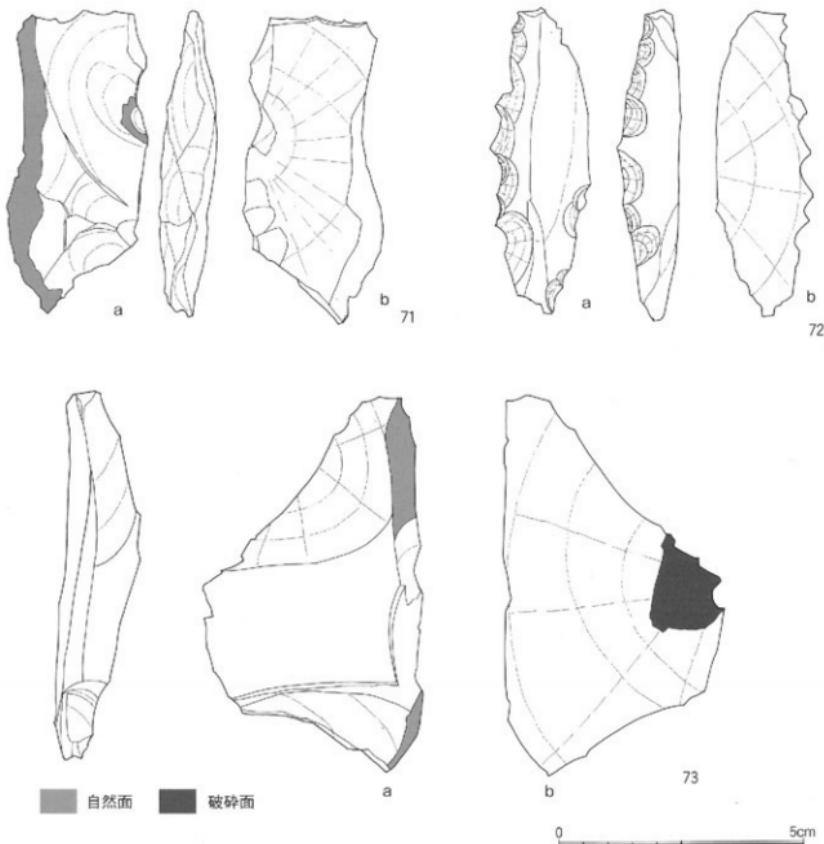
れる。

製塙土器は少量出土している。図化可能な資料は2点(69・70)である。いずれも分厚く器体をつくり、粘土の積み上げ痕跡が明瞭である。胎土に白色の長石粒を混和させているが、クサリ礫の混和はない。器体の色調は、二次焼成をうけ赤茶けているが、基調は(69)が黄灰色、(70)が淡灰色である。口径の小さい(69)は内湾して立ち上がる口縁部から括れて砲弾型の体部をつけるタイプと考えられる。(70)は、やや内湾しながら立ち上がる直立した口縁部に丸い体部を設えると考えられる。

## (2) 石器

サスカイト製の石器が3点出土している。

(71・73)は翼状剥片である。(71)の打面部a面は数回の加撃による剥離痕をとどめ、a面左側面には繰面をとどめる。(73)は大型の翼状剥片であるが、薄手につくる。a面に2回加撃による剥離痕をとどめている。(72)はナイフ形石器である。横長剥片を素材としている。先端部を欠き、基部は剥離を残すが調整は不明である。刃部は先端に向かって6回の刃溝し加工が行われている。断面は三角形を呈する。



第27図 石器実測図

## (3) 金属製品

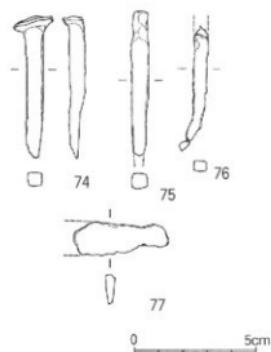
金属質遺物では鉄釘3点と鉄製刀子1点が出土している。

(74)はPit17より出土した鉄製の角釘で頭部を薄く造り出しており、いわゆる頭巻釘とわかる。先端を欠損しており、残存する長さ5.7cm以上、頭部幅1.6cm、身部の太さは6.3mmを測る。

(75)はPit43より出土した鉄製の角釘である。先端および頭部を欠損しており、残存する長さ5.9cm以上、頭部幅5.9mm以上、身部の太さは7.2mmを測る。

(76)は東南部の暗褐色粘質土より出土した鉄製の角釘である。上半を欠損しており、残存長5.1cm、身部の太さは5.3mmを測る。

(77)は西部の第1遺構面ベース層より出土した鉄製品で、刀子の茎部破片と考えられる。残存長は3.8cm以上で、闊は判然とせず、刃部は幅1.3cm、厚さ4.2mm、茎尻幅8.5mmを測る。



第28図 鉄製品実測図



写真1 金属製品レントゲン写真

## 第IV章 まとめ

### 第1節 西岡本遺跡における遺構群の変遷

今回の調査では、2面の遺構面を検出し、第1遺構面で掘立柱建物6棟、柵列1条、第2遺構面では堅穴住居1棟、土坑8ヶ所、性格不明の落ち込み5ヶ所などを検出した。ここではこれらの遺構・出土遺物の内容を検討し、調査範囲内での変遷を明らかにして西岡本遺跡における掘立柱建物群成立の意味を考える手立てとしたい。

#### 掘立柱建物の検討

まず建物の方位、掘形の形状から掘立柱建物・柵列の分類を試みれば以下のように分けられる。

群	建物方位	掘形形状	規模	建物名
A	N40°～44°W	大型	中	SB02・SA05
B	N62°～64°W	小型	小	SB01・SB06
C	N21°～28°W	大型	大	SB04・SB07
D	N20°E	大型	中	SB03

このうちSB01の柱掘形がSB02の柱掘形を切り、SB03の柱掘形がSB02の掘形を切っている。さらにSB01柱掘形の上にSB07の柱礎盤石がのこと、そしてSB07の柱掘形がSB02の柱掘形を切り込んで掘られていることが明確である。また、SB03の柱掘形がSB07の梁柱を掘り込んでいることから、柱掘形の切り合い関係から考えられる建物の変遷は、A群→B群→C群→D群の順に建物群の変遷があったと考えられる。

#### 出土遺物の検討

これらの掘立柱建物群の营造時期については、营造時期が最も遅ると考えられるSB02掘形内からは壺B(3)・壺A(4)・壺Lの底部片(2)の出土があるが、いずれも前川遺跡戸井1・井戸2の出土品〔古代土器1992〕と併行するとみられ、SA05出土の甕口縁部(8)もほぼ同時期の砲弾形の体部を探る甕Cとみてよいであろう。

次にB群に属するSB01の掘形内からはb手法の上師器壺A(1)、SB06からは甕B口縁(10)・壺B(9)が出土しており平城宮SK820から平城宮SK219に併行する土器〔古代土器1992〕とみて大過ないと考えられる。

C群のうちSB04の柱掘形からは須恵器蓋(7)、土師器甕(11)・壺(12)が出土している。このうち壺(12)は平城宮SK2113出土壺〔古代土器1992〕と器形では共通するものの、胴体部の張りを欠き、やや後出する壺と考えられ、小破片ではあるが伴出した須恵器蓋(7)の形態から平安宮中務省SK201〔古代土器1992〕に併行する土器と考えられる。一方SB07柱掘形内からは壺底部が1点ではあるが出土している。この壺底部はヘラ切りによって底部が設えられ、形態から播磨産の壺であると考えられる。時期は概ね札馬II期からIII期〔中村 浩1982〕もしくは森内秀造〔森内秀造1986〕の第二段階と考えられる。

D群としたSB03の柱掘形からは土師質の棒状土製品が出土してものの直接時期を比定しうる出土遺物は見出せない。上層の遺物包含層のうち明らかに中世に降る須恵器壺底部(30)・鉢(33)・瓦器壺(31)が見出されることから、13世紀前半頃には建築されていた可能性も考えられる。

次に、掘立柱建物群が形成された整地層出土の遺物を検討すれば、丸みをもつてつくられた体・底部に外に踏ん張る付け高台を設ける壺B(50・52)や、直線的に外上方にのびる口縁部直下に短い付け高台を付け、体部と高台の境を1条の稜線で画する壺B(49)は、平城京左京一条三坊十五坪SD485出土

器〔古代土器1992〕のなかに見出せる。その他、b手法でつくられた土師器皿C(64)と蓋類5点も、同一時期の土器群であると考えられ、整地層内出土の古墳時代終末期のカエリをもつ蓋(54)や弥生時代末期から古墳時代初頭の高杯片・壺形土器底部片を除く、出土土器の大部分がこの時期に相前後するとみられる。

#### 整地層下の遺構・遺物の検討

整地層下の遺構堅穴住居SB201は明確に時期を示す遺物はないが、薄手の土師器細片のみが出土している。SK207は上師器壙(22)を単独で横に埋め、土器棺である可能性も考えられる。また整地層内からは7世紀初めの須恵器蓋(54)が出土することから、これらの遺構は古墳時代後期後半期の遺構と考えられる。SK206は底部叩きのある古墳時代初頭の壺が数個体出土し、西岡本遺跡の東側に広がる岡本北遺跡〔村上逸朗・小林健二1998〕に継続する遺構と考えられる。

#### 掘立柱建物造営の時期

今回の調査地点は、第Ⅱ章でも概略述べたように上位扇状地の扇央部に位置していることから、旧河川が谷状の起伏をつくり、この谷状地形の埋没は自然の土石流を含めて幾度と繰り返されたとみられる。その痕跡は、第4～6次調査で検出された谷状の落ち込みの継続と考えられた。掘立柱建物建設時の地業は、この谷を埋没させた土石流帯の末端を弥生時代終末から古墳時代終末期の遺構を削平しながら盛土地業されたとみられる。このことは、第2遺構面の検出遺構の状況や整地層に混入する遺物などから明らかである。この整地の時期は、出土遺物の項でも述べたように平城京左京一条三坊十五坪SD485〔古代土器1992〕の時期に相前後する8世紀第2四半期以降とみることができる。掘立柱建物のうち最も造営時期がさかのばるA群の建物群は前川遺跡井戸1・井戸2〔古代土器1992〕の時期である8世紀第3四半期初め、B群の建物群は平城宮SK219〔古代土器1992〕の時期である8世紀第3四半期後半、C群の建物群のSB04は決めてとなる土器は欠くが平城宮SK2113から平安宮中務省SK201〔古代土器1992〕にいたる8世紀から9世紀の交わりにあると考えられる。一方SD07の時期は森内編年〔森内秀造1986〕の第二段階九世紀末頃と考えられる。

以上の検討の結果、西岡本遺跡における掘立柱建物群は、8世紀中頃前後に斜面地形の造成が行われ營造が開始され、8世紀第3四半期初めから8世紀第3四半期後半まで継続的に建物が建てられたと考えられる。そして、いったんこれらの掘立柱建物が廃された後に8世紀末葉に至って大型掘立柱建物SB04が造営されたと考えられる。その後、降って9世紀末頃と13世紀前半頃には比較的小規模な掘立柱建物が建築されたとみられ、西岡本遺跡における掘立柱建物群の機能は中世初頭に至るまで命脈を何らかの形を残して継続されたと推定されるのである。

## 第2節 西岡本遺跡の歴史的意義

現在までに検出された兎原郡東部の主要掘立柱建物を例示すれば第2表のような結果となる。掘立柱建物SB04は、8世紀から9世紀初めに造営された西岡本遺跡最大の掘立柱建物であることは明確である。すなわち、SB04の建物面積は復原推定約42m<sup>2</sup>と奈良時代～平安時代前期において兎原郡内で屈指の規模をもつといえる。兎原郡の都衙もしくは芦屋駅家の主屋と推定される津知遺跡第2地点SB1・SB4の東西棟〔森岡秀人1999〕を除いて、寺田遺跡第127地点SB103〔前山佳久他2002〕の66m<sup>2</sup>に匹敵する大規模掘立柱建物とができる。さらに平安時代前期に限定すれば、最大規模の建物といえる。また当地域の地勢的な条件からみて、大阪湾を望んだ南北棟の大型建物の建築は、住吉川流域を一望できる立地にあり、平安時代前期の兎原郡内において、当該建物が中心的な位置を占めていた可能性を窺わせる。

遺跡名	次数・地点	遺構名	剖面	規模(m)	棟方位	面積(㎡)	時期	その他の特徴	文献
津知	第2地点	SB1	4×3	東西9.5×南北7.5	N85°E	71.3	奈良末～平安前期	側柱・東西棟	森岡秀人1999
		SB2	1×2	東西5×南北3.5	N5°W	8.8	奈良末～平安前期	側柱・南北棟	
		SB3	3×3	東西5.8m×南北5.2	N5°W	25	奈良末～平安前期	側柱・南北棟	
		SB4	3×2	東西7.9×南北4.5	N85°E	35.6	奈良末～平安前期	側柱・東西棟	
深江北町	第9次	SB01	2×5	東西4.2×南北7.3以上	N19.5°W	30.7	奈良時代前半	側柱・南北棟・北庇	山本雅和2002
		SB02	2×4	東西4.2×南北7.4以上	N18.5°W	31.1	奈良時代前半	側柱・南北棟	
		SB03	1×3以上	東西4.6×南北6.4以上	N35°W	29.4	奈良時代後半	側柱・南北棟	
		SB04	? ×2以上	東西5×南北4.3以上	N35°W	—	奈良時代後半	側柱・南北棟	
		SB05	1×2以上	東西4.3×南北4.3以上	N3°W	18.5	奈良時代後半	側柱・南北棟	
		SB06	2×2	東西4.3×南北4.7	N5°W	20.2	奈良時代後半	側柱・南北棟・西に延	
		SB07	2×2	東西3.0×南北3.4	N85°W	11.2	奈良時代後半?	側柱・南北棟	
寺田	第1地点	接物1	3×2	東西4.2×南北3.6	N5°W	15.2	奈良～平安	蛇柱・南北棟	南 博史1985
		接物2	2以上×2以上	東西3.7以上×南北3.6以上	N3°W	—	奈良～平安?	側柱?	
		建物3	3×3	東西5.5×南北5.9	N3°W	32.5	奈良末～平安初め	L字形・和銅閣式	
	第127地点	SB101	3×5	東西5.4×南北10.0	N4°W	54	奈良前平ころ	側柱・南北棟	前田佳久地2002
		SB102	2×1以上	東西4.0×南北2.0以上	N4°W	—	奈良前平ころ	側柱・南北棟	
		SB103	3×5	東西6.0×南北11.0	N4°W	66	奈良前平ころ	側柱・南北棟	
		SB104	2×2以上	東西5.4×南北5.4以上	N0°W	—	奈良?	側柱・南北棟	
西岡本	第8次	SB401	2以上×3以上	東西4.0以上×南北4.8以上	N6°E	—	奈良前平ころ	蛇柱・南北棟	前田佳久地2003 本報告書
		SB01	2×2	東西3.6×南北3.6	N62°W	13	奈良時代後半	蛇柱・南北棟	
		SB02	2×3	東西4.8×南北5.6	N40°W	26.9	奈良時代後半	側柱・南北棟	
		SB03	2×2	東西4.2×南北4.8	N20°E	21.2	平安時代後期?	側柱・南北棟	
		SB04	4×3以上	東西6.5×南北5.5以上	N21°W	42.3推定	奈良末～平安前期	側柱・南北棟・東西庇	
		SB05	2×2?	東西3.4×南北3.4	N62°W	11.6	奈良時代後半	側柱・南北棟	
		SB07	2×2	東西3.8×南北5.0	N28°W	19	平安時代前頃	側柱・南北棟	

第2表 古代菟原郡東部主要掘立柱建物一覧（文献[山本雅和2002]表36を一部改変）

掘立柱建物群の建設においてさらに注目される点は、奈良時代～平安時代初めに本来急斜面地、もしくは谷状地形である当該地に盛土造成を行い、平坦地を造成したうえに掘立柱建物を構築している点である。こういった地業が行われた事実は何を物語るのであろうか。ひとつには奈良時代後期、三世一身法（養老7年、723年）の施行や、墨田永年私有令の制定（天平15年、743年）などによる墨田の拡大があるとみられる。当時の貴族や地方豪族の大土地私有への意欲は、私有田の拡大に向かい、一般庶民を動員した大規模な地業・開発が可能な労働力の集約も実現したとみられる。その墨田の経営のために、開発地に「莊使（莊司）」を置いたが、当然のことながら、莊使が駐在する「莊所」を設けていたとみられる。それらを中心とした土地全体は「ナリドコロ」（莊）と呼ばれた。所謂「初期莊園」の成立である。〔岩本次郎1989〕つまり、このような奈良時代後期から平安時代の社会情勢のなかで西岡本遺跡における大規模地業と建築をみると、当地に「莊所」にあたるような施設が設けられた可能性も考慮にいれなければならない。

以上のように掘立柱建物群の成立経緯を考えれば、時代は降るが西岡本遺跡のある野寄の地域が「山路（山道）莊」という莊園に組み込まれていた事実は注目される。この「山路莊」は住吉・野寄・岡本・横屋・魚崎・青木・西青木・庄戸の各村で構成されていた。〔豊中市史2001〕これは現在の住吉川流域の大部分にあたり、古代住吉郷と佐才郷を合わせた広域を領有する莊園としてあった。この「山路莊」の初見は応徳元年（1084年）に灘区東部もしくは東灘区西部にあった「今南莊」と相論を起こし、朝廷の審理を受けたという記事に残っている。つまり菟原郡「山路莊」は文献上では遅くとも11世紀半ば以前には成立していたと考えられるが、保安元年（1120年）「山路莊」を所有していたとみられる「西御方」が死亡し、その家領相続が藤原賴宗曾孫の宗忠（中御門家）と宗忠の叔父である宗通（坊門家）の後家との間で争われ、明確な決着は不明ながら12世紀終り頃に至るまでは坊門家が伝領した形跡が認められる。〔栗山佳子2008〕

この「山路莊」と西岡本遺跡において検出された掘立柱建物群を直接結びつけることはできない。しかしながら、西岡本遺跡が住吉川流域のほぼ全域を見渡せる立地にあり、そして建物群の營続期間と莊

園の経営期間を勘案すれば、今回の西岡本遺跡で検出された奈良時代後期～平安時代前期に行われたとみられる大規模宅地の造成と掘立柱建物群の造営は、古代兎原郡東部における地域開発の一端を示すと考えられ、文献史学の面からの検討も含めて、今後の総合的な追究が必要となるであろう。

## 引用・参考文献

- 浅岡俊太2001 西岡本遺跡 六甲山麓遺跡調査会 2001
- 浅谷誠吾2011 西岡本遺跡第7次調査 平成21年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2011
- 池辺 順1966 和名類聚抄地名考証 吉川弘文館 1966
- 石野博信1967 神戸市金魚山遺跡 古代学研究48 古代学研究会 1967
- 石野博信他1970 兼野山遺跡調査報告書 神戸市教育委員会 1970
- 井尻 権2003 小路大町遺跡第4次調査発掘調査報告書 神戸市教育委員会 2003
- 岩田明広1998 神戸市東灘区本山遺跡(第22次) 神戸市教育委員会 1998
- 岩田明広1996 神戸市東灘区魚崎中町遺跡(第3次調査) 神戸市教育委員会 1996
- 岩本次郎1989 藤田開拓の時代－拡大する農業生産－ 古代史復原9 古代の都と村 講談社 1989
- 梅原木治1935 住吉村新発見の銅鐸 兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告11 兵庫県 1935
- 梅原木治1925 武庫郡マンハイのヘボン塚古墳 兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告2 兵庫県 1925
- 角川地名1988 角川日本地名大辞典23兵庫県 角川書店 1988
- 高谷美宜1992 郡家遺跡 兵庫県史 考古資料編 兵庫県 1992
- 栗山作子2008 第三章中世の本庄地域 第節院政期の本庄地域 本庄村史 歴史編 本庄村史編纂委員会 2008
- 神戸市教委1999 神戸考古百選－最新資料が語る神戸一万年の歴史－ 神戸市教育委員会 1999
- 神戸大考古1992 生駒古墳調査報告 神戸市考古学研究会 1992
- 古代上原1992 都城の土器集成 古代の土器1 古代の土器研究会 1992
- 資本安明1992 功が坂古墳調査 平成元年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1992
- 須藤 宏1992 木山遺跡 平成元年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1992
- 須藤 宏2009 木山中野遺跡第3次発掘調査報告 神戸市教育委員会 2009
- 丹治樹明・須藤宏1992a 斎北町遺跡 平成元年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1992
- 丹治樹明・須藤宏1992b 住吉宮町遺跡 平成元年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1992
- 富山平人1996 西岡本遺跡第3次調査 平成5年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1996
- 豊中市史2001 今西家文書 新修豊中市史 第5巻古文書・古記録 豊中市 2001
- 中幡さやか2003 本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書 神戸市教育委員会 2003
- 中村 浩1982 札馬古窯跡群発掘調査報告 加古川市文化財調査報告7 加古川市教育委員会 1982
- 西岡巧次1987 萩北町遺跡 発掘調査報告書 神戸市教育委員会 1987
- 西岡誠司1998 西岡本遺跡第3次発掘 平成7年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1998
- 樋口清之1942 桃津保久良神社遺跡の研究 国学院大学院紀要4 国学院大学 1942
- 東京代秀2009 北青木遺跡第5次調査 平成18年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2009
- 前田佳久他2002 5号遺跡発掘調査報告書(第127地点・130地点・132地点・133地点) 芦屋市教育委員会 2002
- 前田佳久他2003 寺田遺跡発掘調査報告書(第132地点・133地点・137地点・139地点・141地点・142地点) 芦屋市教育委員会 2002
- 丸山 遼1989 那家遺跡城の前地区第23次調査 昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1989
- 三木文雄1969 神戸市東灘区本町森字坂下町出土銅鐸 神戸市櫻ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書 兵庫県教育委員会 1969
- 南 博史1985 芦屋市寺山遺跡発掘調査報告書 財団法人古代学協会 1985
- 宮本郁直1987 本町東山遺跡 昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1987
- 村上逸朗・小林健二1998 岡本北遺跡第2次調査 平成7年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1998
- 村川行弘1965 神戸市東灘区本町中野字牛生駒出土の劍鋒 考古学雑誌51-2 日本国考古学会 1965
- 森内秀道1986 平安時代の窯業生産－播磨地方の須恵器生産を中心に－ 歴史における政治と民衆 日本史論叢会 1986
- 森岡秀人1999 津知路跡第17地点発掘調査概要報告書 芦屋市文化財調査報告 第34集 芦屋市教育委員会 1999
- 安田 達2001 佐古町遺跡第24次、第32次発掘調査報告書 神戸市教育委員会 2001
- 山本雅和2002 深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書 神戸市教育委員会 2002
- 吉本良秀1913 桃津古武庫郡阿木村の小石棺に就いて 考古学雑誌3-11 日本国考古学会 1913
- 陸軍測量1911 帝國陸軍陸地測量部明治43年測圖 二万分一地形図神戸及明石海峡近傍一号 1911
- 渡辺伸行1985 東求女塚古墳 昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1985

# 図 版



1. 西岡本遺跡周辺航空写真（南から）平成6年3月撮影



2. 調査前東側仮設柵設営状況

図版2



1. 調査区東部全景第1遺構面（北西から）



2. 調査区西部全景第1遺構面（北東から）



1. 調査区東部第1遺構面（北から）



2. 調査区西部第1遺構面（北から）

図版 4



1. 掘立柱建物SB01（西から）



2. 掘立柱建物SB02（南西から）



1. 掘立柱建物SB03 (北西から)



2. 掘立柱建物SB04 (北から)

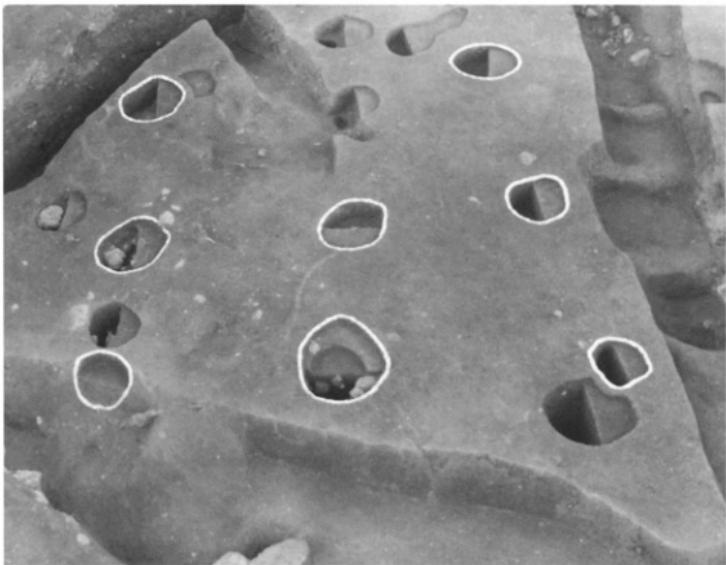
図版 6



1. 掘立柱建物SB04 (東から)



2. 掘立柱建物SA05 (北から)



1. 挖立柱建物SB06 (南東から)



2. 調査区西部全景第2遺構面 (東から)

図版 8



1. 調査区東部第2遺構面（北から）



2. 調査区西部第2遺構面（東から）



1. 穫穴住居SB201 (北から)



2. 土坑SK202 (北から)

図版10



1. 土坑SK208（北から）



2. 土坑SK202（北から）



1. 土坑SK205 (東から)



2. 土坑SK206 (北から)

図版12

出土遺物 土器(1)



48



56



64



63



47



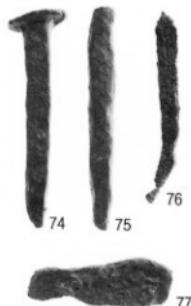
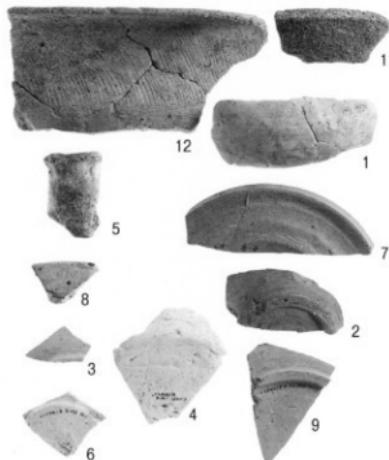
22



21

図版内番号は  
実測図番号

## 出土遺物 土器(2)・金属製品・石器



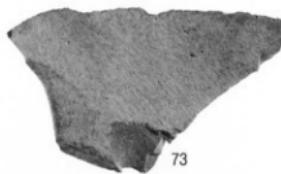
鉄製品

## 掘立柱建物掘形出土土器

a面



b面



## 石器

図版内番号は  
実測図番号

## 報告書抄録

ふりがな	にしおかもといせき だいはちじ はっくつちょうさほうこくしょ						
書名	西岡本遺跡 第8次 発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	西岡巧次(編) 中村大介						
編集機関	神戸市教育委員会						
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号						
発行年月日	平成23年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所取遺跡	所在地	市町村 遺跡番号					
西岡本遺跡	兵庫県神戸市 東灘区西岡本 五丁目7-8	28110 43	34° 43' 43"	135° 15' 48"	平成21年11月24日 平成22年1月22日	450m <sup>2</sup>	宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西岡本遺跡	集落?	奈良時代~平安時代前期・古墳時代・後期旧石器	掘立柱建物6棟 櫛1条・土坑8基 性格不明土坑5ヶ所 堅穴住居1棟	須恵器・土師器 製埴上器 鉄製品(釘・刀子) サヌカイト製石器 (翼状剥片・ナイフ形石器)			
要約	本遺跡は住吉川左岸扇部に位置し、8世紀中頃前に斜面地形の造成が行われ營造が始まり、8世紀第3四半期初めから8世紀第3四半期後半まで継続的に建物が建てられたと考えられる。そして、いったんこれらの掘立柱建物が廃れた後に8世紀末葉に至って大型掘立柱建物SB04が造営されたと考えられる。その後、降って9世紀末葉と13世紀前半には比較的小規模な掘立柱建物が建築されたとみられ、西岡本遺跡における掘立柱建物群の機能は中世初頭に至るまで命脈を何らかの形を残して継続されたと推定されるのである。特に平安初期の建物は東灘区で最大規模の南北棟建物であり、平安時代を通じて当地にあったと考えられる莊園「山路荘」に関連する建物群である可能性も考えられる。						

### 西岡本遺跡 第8次 発掘調査報告書

平成23年3月31日発行

発行 神戸市教育委員会  
 〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号  
 TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社  
 神戸市中央区弁天町1-1  
 TEL 078-371-7000

